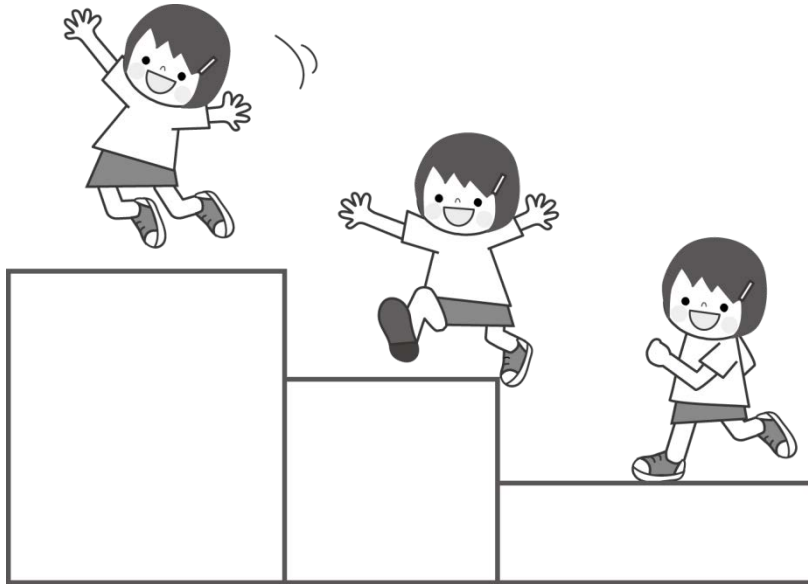


平成 24 年度 高知県教育公務員長期研修に係る共同研究

【研究主題】 保育所・幼稚園と小学校の接続に関する研究

アプローチカリキュラム



平成24年度長期研修生

小松 和佳

高知県教育センター チーフ(幼保研修担当)

尾中 映里

0歳～年長8月 9月 10月 11月 12月 1月 2月 3月 4月(1年生) 5月	
≪保育所・幼稚園≫	
<p>課題</p> <ul style="list-style-type: none"> ・基本的生活習慣の定着に個人差がある ・場と相手に応じた適切な言葉遣いや行動ができない幼児がいる ・最後までやり抜く継続性や精神力に弱さが見られる 	
<p>子育ての悩み</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ 困難なことにつまずいても気持ちを切り替えて乗り越えようとする ◆ いろいろな活動や遊びにおいて自分の力で最後までやり遂げ、満足感や達成感をもつ ◆ 相手の話を聞いて分かったり、自分の思いや考えなどを相手に分かるように伝えたりしようとする ◆ 友だちとのかわりを通して互いのよさを分かち合い、心を通わせながら一緒に遊びを進めようとする ◆ 共通の目的をもって話し合ったり、役割を分担したりして、力を合わせてやり遂げようとする 	
<p>定着させたい力</p> <p>生きる力の基礎</p> <p>確かな学力につながる基礎</p> <p>○学びを支える基礎 [好奇心、思考力、探究心、達成感、向上心、協同性等]</p> <p>○学びの芽生え ・コミュニケーション☆ ・図形、長さ、ことば(文字)、数量等</p> <p>豊かな心につながる基礎</p> <p>○規範意識☆ ○自尊心☆ ○人間関係</p> <p>体力・健康につながる基礎</p> <p>○基礎的な生活習慣 ○食 ○健康・安全</p> <p>・身近な物や用具などの特性や仕組みを生かしたり、いろいろな予想をしたりして、楽しむ ・友だちと積極的にかわり、相手の思いや考えなどを感じながら行動する ・自分の考えや気持ち、困っていることを自分なりの言葉で話そうとする</p> <p>・物との多様なかわりの中で、物の性質や仕組みについて考えたり、気付いたりする ・共通の目的に向かって取り組む中で、みんなで協力し合うことの楽しさや責任感、達成感を感じる</p> <p>・生活や遊びを通して、必要感をもって、数えたり、比べたり、組み合わせたりしながら、物の数量や長短、広さや速さ、図形の特徴等に関心をもつ ・文字が、生活や遊びの中で人と人をつなぐコミュニケーションの役割をもつことに気付き、文字を読んだり、書いたり、使ったりする</p> <p>・相手も自分も気持ちよく過ごすために、してよいことと悪いことの区別などを考えて行動する ・友だちの思いや考えに気づき、心を通わせながら一緒に遊ぼうとする ・身近な人々に、自分からも親しみの気持ちをもって接する</p> <p>・クラスのみんなと心地よく過ごしたり、より遊びを楽しむためのきまりがあることが分かり、守ろうとする ・自分の気持ちを調整し、友だちと折り合いをつけようとする ・関係の深い人々との触れ合いの中で、自分が役に立つ喜びを感じる</p> <p>・衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動の必要性に気づき、自分でする ・いろいろな遊びの中で体を動かす喜びを味わい、進んで体を動かそうとする ・自分の健康や安全についての心構えを身に付け、自分の体を大切にすることを覚える</p>	
<p>主な経験内容・活動</p> <p>1 体を動かして遊ぶ楽しさやみんなで力を合わせる喜びを味わう ○リレー ○かけっこ ○綱引き ○おにごっこ ○ドッジボール ○マラソン ○なわとび ○鉄棒</p> <p>2 物の数や文字に興味を深め、遊びや生活に取り入れる ○お店屋さんごっこ ○郵便屋さんごっこ ○カルタ ○トランプ ○なぞなぞ ○すごろく ○しりとり</p> <p>3 自然に触れ、自然物を通して気づいたこと感じたことなどイメージを膨らませた遊びをしようとする ○秋・冬の自然物を使った遊び ○氷遊び</p> <p>4 友だちと互いに考えやイメージを出し合いながら、協力して遊びを進めていく充実感を味わったり、表現したりする楽しさを味わう ○劇遊び ○楽器遊び ○ごっこ遊び ○歌</p> <p>5 自分なりの目当てをもって繰り返し取り組む ○なわとび ○こま回し ○たこ作り ○たこ揚げ ○編み物</p> <p>6 自分たちの成長を感じ、自信を持って行動する ○卒園にむけての活動 ○園生活を振り返り、やりたい遊びを友だちや異年齢児と一緒に楽しむ</p> <p>7 異年齢児との遊びや当番活動を通して、自信をもって活動しようとする ○異年齢児との遊びや交流活動 ○給食当番 ○掃除当番 ○出席調べ ○飼育活動</p>	
<p>環境留意点</p> <p>1 ◎自分なりにめあてをもって取り組み、もっている力を十分に発揮して遊ぶことができるように、運動遊びに必要な道具を準備したり場の確保をする ○子ども同士の話し合いの場、協力し合う姿、頑張りを大切に、友だち同士認め合えるような雰囲気づくりを心がける</p> <p>2 ◎遊びの中で、数えたり、並べたり、比べたり、また、文字の必要性に気づく場面を作る ○子どもたちの興味や活動意欲の高まりを十分に受け止めながら力が発揮できるようにする</p> <p>3 ◎季節の変化を生活の中に多く取り入れる ○身近な環境の中の様々なものとの出会いの中で、心を揺さぶり、子どもたちのイメージを大切にしながら創造性を豊かにしていく</p> <p>4 ◎十分遊び込むことができるような時間や場を確保する ◎要求が出た時は出せるように、様々な材料を準備しておく ○子どもたちの中から出てくる思い、イメージを大切に、そのイメージを実現できるよ、寄り添い、一緒に考えながら活動を進める</p> <p>5 ◎保育者もモデルとなり、遊びを広げるような場面を作る ○目的に向かって考えたり工夫したりしながら、友だちとやり遂げたという充実感、満足感を味わわせる</p> <p>6 ◎今まで経験した遊びの中で、楽しかったことが十分にできる環境(用具・材料等)を設定する ○一人ひとりの良さを仲間として認め合い、個々の力を十分に生かせるよう配慮する ○卒園にむけてさまざまな心情の変化を察しながら、成長した点に気づかせ周囲の人たちに感謝の気持ちをもてるようにする ○新しい生活への期待と不安な気持ちを受けとめる</p>	
<p>スタートカリキュラムの特徴</p> <ul style="list-style-type: none"> ○一人ひとりの活動時間を確保し、活動的な学習内容を多く取り入れている。 ○コミュニケーションカが高まり、友だちとのかわりが深まる ○目標を「楽しむ」「慣れる」「親しむ」などにして、個の内面の育ちを大切に <p>スタートカリキュラムの工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ①児童が主体的に活動でき、安心して活動が行えるような環境を設定する ②複数の教科の目標や内容を組み合わせ合わせた総合的な学習の時間を設定する ③幼児期に経験してきた、「遊びを通して総合的に学ぶ」指導方法や指導形態を小学校の教科の学習や生活に取り入れる ④教師のかわり方の工夫をする 	
<p>連携・交流・連携</p> <p>子ども</p> <ul style="list-style-type: none"> ・第1回 保幼小交流活動(保幼小学校のウォークラリー) ・第2回 保幼小交流活動(秋の自然物を使って音の出るものを作る) ・第3回 保幼小交流活動【一日入学】(ゲーム、教室・学校案内) <p>教職員</p> <ul style="list-style-type: none"> ☆交流活動、一日入学等、事前打ち合わせ及び情報交換会 ☆保幼小合同研修会の実施(研修計画位置づけ) ☆要録の送付及び受け取り 	
<p>連と家携の庭</p> <ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣の見直し(早寝、早起き、朝ご飯、排便のリズム) ・子どものよい面や成長している姿を保護者に伝える ・就学への心構えや生活習慣を再確認する ・集団生活を通し、協力し合い、認め合う中で、共に育つことを伝える ・保護者の期待や不安を知り、適切に対応する ・学年便り等で活動やねらい、子どもの様子等を伝える ・学年、学校体制の取組を伝える 	

事例の見方 1

5つの事例

「言いたい」
「ボールの取り合い」
「ごめん」
「ルールを作る」
「こおりオニしたい」を
「友だちとのかかわり」
としてまとめる。

5つの事例から、育っ
ている力をまとめる。

5つの事例から、小学
校教育課程へのつなが
りをまとめる。

友だちとのかかわり 1 身体を動かして遊ぶ楽しさやみんなで力を合わせて喜びを味わう	
1～3月頃	5歳児
友だちとの関係が深まってくると、共通の目的をもって活動することの楽しさやルールの必要性が分かってくる。時には、なかなかうまく遊べずいざこざになることもある。こうしたいざこざを重ねながらも、繰り返し遊ぶ中で、子ども同士のかかわりが育っていく。	
2/7 ↓	ドッジボールの組分けで、相手チームに力の強い人が集まっていることに気づき、組分けをやり直したいと提案する。
2/7 ↓	ボールの取り合いから、相手の思いに気付いたり、自分の気持ちを調整したりしている子どもたち。自分の気持ちに折り合いがつけば、またみんなと一緒に遊びを始めることができる。
2/7 ↓	ボールが当たって泣きそうになったが、相手の気持ちに気付いたり、仲良しの友だちに思いを受けとめてもらったりすることにより、自分の気持ちを立て直し、また、一緒に遊ぼうとする。
2/13 ↓	みんなで遊んでいるとルールを共通にする必要性に気付く。その時、一緒に話し合いを行ったり、みんなでルールを工夫したりしながら、遊びを進めることができる。
2/14 ↓	「こおりオニ」をするために、友だちに声をかけ、遊びに誘う。最初はなかなか人が集まらなかったが、少しずつ、集まりだした。最後は、3、4歳児も含めて、総勢約20名で「こおりオニ」が始まった。
育っているもの	
確かな学力につながる基礎 ○学びを支える基礎 ・協同性	豊かな心につながる基礎 ○規範意識 ・ルールの大切さについての気付き ・ルールの工夫 ・不公平さについての気付き ○自尊感情 ・相手の思いについての気付き ・相手を思う気持ち
体力・健康につながる基礎 ○健康・安全 ・身体を動かす喜び ・自ら運動する意欲	
スタートカリキュラム B-4 こうていのゆうぐであそぼう H-1 ともだちといろいろなおににあそびをしよう K-2～3 なかよし集会をしよう	
小学校教育課程 ・体育編 第1学年～第4学年 内容E「ゲーム」 ・体育編 第5学年～第6学年 内容E「ボール運動」 ・道徳編 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 P40 1主として自分自身に関すること(3)	

事例の見方 2

見取った事例を記録者が考察する。

保育者が、予想される子どもの思いや保育での援助や環境構成の意図を詳しく記述する。

育っている力を、
「確かな学力につながる基礎」
「豊かな心につながる基礎」「体力・健康につながる基礎」
に整理する。

育っている力は、小学校教育課程のどこにつながっているのか示す。

言いたい	
2013年2月7日(木)	5歳児
<p>事例</p> <p>ドッジボールをしていた5歳児たち。1回目のゲームが終わったので、2回目のゲームを始めることにした。自分たちで好きな方のコートに行ってチーム分けをした。 ナオコは、片方に力の強い男の子が集まったことに気がつき、「向こうのチームに、男の子が固まっている。」と保育者に言った。保育者は、ナオコの気持ちを聞いた。保育者がそばにいる中で、ナオコは、チーム分けをもう一回したいことをみんなに伝えることにした。②ナオコの気持ちを聞いた力の強い男の子たちが、「そしたら、グーバーでジャンケンをして、チーム分けし直そう。」と言い、もう一度チーム分けをすることに決めた。</p>	
<p>記録者考察</p> <p>①より ドッジボールの組分けで、不公平さに気付いたナオコ。力が同じぐらいのチームで勝ち負けを争うことが楽しいドッジボールで、明らかに力の差があると、遊んでいても面白くない。ナオコは、このままで遊ぶことに納得がいかなかった。そこで、自分の気持ちを保育者に訴えたのであろう。</p> <p>②より 保育者の援助のもと、自分の気持ちをみんなに伝えたナオコ。力の強い男の子たちは、自分たちが一緒にチームになると勝つのがうれしいとは思って、みんなとドッジボールを続けたいという思いもあったので、「公平に組分けをしたい」というナオコのルールを受け入れたのである。ルールを守ると仲良し同士、力の強い者同士と一緒にチームにならず、我慢しなければならぬが、楽しく長く遊びや雰囲気を楽しんでいくことができると考えたのだろう。</p>	
<p>保育者考察</p> <p>1回目と違ってナオコは、2回目のチーム分けをしたとき、相手チームに力の強い男児が集中していることに気付くと、不満そうな表情を浮かべながら保育者を見ていた。保育者が声をかけると、「チームに力の差があること、また負けてしまうかもしれない、もう一度チーム分けをしたい」という気持ちを話し出した。ナオコの発言は周りにいた友だちにも聞こえていたと思うが、強いチームにいた子どもたちは、自分たち優位で試合が進んでいくことを予想していたのだろう。なかなかナオコの思いを聞き入れようとせず、黙ったまま保育者とナオコのやりとりを聞いていた。せっかくなのナオコの思いを、いっしょに遊んでいる友だちにも気付いて欲しいし、一緒に考えていって欲しいと思いついて、周りの友だちにも伝えてみるよう保育者は声をかけた。ナオコは、保育者に気持ちを伝えたことで、「自分の気持ちを伝えてもいいんだ」という勇気が出たのではないかと、ナオコの思いを聞いた相手チームのミノルが、「もう一度組分けをしよう」と周りに提案すると、腕に自信のあるタロウが「じゃ、おれとマサヒトは分かれるようにしようぜ」と二手に分かれた。そして、子どもたちなりに、力が分散するように考えたチームができると、ナオコに確認をしていた。ナオコも安心したように頷き、納得したようだった。話し合いの時間はかかったが、どうすればいいのかわからずに思っていたことを伝えたり、友だちの思いに耳を傾けたりしようとする姿から、「もっとドッジボールをやりたい」「みんなで早くやろう」という遊びへの強い気持ちがあったのではと考察する。トラブルがあったり遊びがうまく進まないこともあるが、みんなで楽しく遊ぶためにはどうすればいいのかわからず、自分の思いを伝えたり、友だちの気持ちを受け入れたりして遊ぶことを繰り返しながらより協同に向かって遊びが進んでいけるようになるのではと考える。</p>	
<p>育っているもの</p>	
<p>確かな学力につながる基礎</p> <p>○学びを支える基礎</p> <ul style="list-style-type: none"> ・協同性 	<p>ルールのある遊びの中で、互いの言動や気持ちを認めて受け入れるような、友だち同士のかかわりを通して、仲間とつながる喜びを実感していく。</p>
<p>豊かな心につながる基礎</p> <p>○規範意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・不公平さについての気付き 	<p>グループで遊ぶようになると、遊びの中で、公正さという問題に突き当たる。正しくないことやずるいことに気付いたら、指摘したり、改善したりしていくことでもっと楽しく遊ぶことができる。</p>
<p>○規範意識</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ルールの大切さについての気付き 	<p>友だちとの一緒に遊ぶ楽しみ、遊びのルールを作り、それを守って遊ぶことの面白さを十分に体験することで、遊びのルールを守ろうとする気持ちを持つことができる。</p>
<p>体力・健康につながる基礎</p> <p>○健康・安全</p> <ul style="list-style-type: none"> ・身体を動かす喜び 	<p>友だちと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地良さを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。</p>

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」
・第1期ははじめまして B-4 いっしょにあそぼうよⅡ～こうていのゆうぐであそぼう①～ 遊具遊びに進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、場の安全に気をつけようとしたりする。
・第2期がっこうだいき H-1 みんなであそぼうよⅡ～ともだちといろいろなおにあそびをしよう～身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組もうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

道徳編

・P40 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 1主として自分自身に関すること(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

人としてやってよいこと、してはならないことをしっかりと区別、判断できる力を養うとともに、おかしいと思ったことに気付いたり、よいと思ったことは、遠慮しないで進んで行ったりすることができることが大事である。

・P45 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 4主として集団や社会のかかわりに関すること(1)約束やきまりを守り、みんなが使った物を大切にすること。

身近な社会生活における出来事なども取り上げながら、約束やきまりをしっかりと守る態度を育てることが大切である。

リレーをしよう

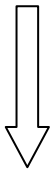
1 体を動かして遊ぶ楽しさやみんなで力を合わせる喜びを味わう

9月中旬～10月上旬頃

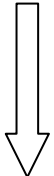
5歳児

5月下旬頃、子ども達は、小学校の運動会で見たリレー遊びをしていた。9月になり、10月の運動会を前に、しばらくぶりにリレー遊びをすることになった。

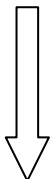
9/ 13



この日は、リレーをするために、自分たちでトラックに線を引き、ラップの芯のバトンを保育室から持ってきて、リレー遊びを始めようとした。チームを作り、人数を合わせるころから子ども達は自分たちで話し合いを始めた。2チームに分けているのだが、途中人数が増えると、上手に分けることができない。



みんな早く走りたくなったのか、人数を確認しないまま、リレーを始めたが、やはり、次の走者がいなかったり、人数が合わなかったりして、スムーズにバトンが繋がらなかった。もう一度リレーをしようと、自分たちでチーム分けをしていく中で、少しずつ要領が分かってきた。また、走っているうちに、リレーのルールも理解してきた。



2回のリレー遊びが終わり、「アンカータスキ」の必要性に気付いた。保育者に、アンカータスキの代わりにピンクのリボンを用意してもらい、3回目のリレー遊びを始めた。アンカータスキがあるので、今度は、勝敗がついた。



10/ 13
運動会
当日へ

楽しそうに遊んでいるリレー遊びに、4歳児が加わった。5歳児は、4歳児と手をつないだり、一緒に順番を待ったりと、自分ができることをやっていた。5回目のリレーでやっとリレーの形になっていた。この日から、リレー遊びが広がり、クラスを二つに分けて、グループ対抗リレーになっていき、運動会をむかえたのである。



育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・自立心
- ・協同性

○学びの芽生え

- ・個数を比べる力
- ・コミュニケーション力
- ・遊びに使う物を工夫して作る力

豊かな心につながる基礎

○規範意識

- ・ルールの理解

○自尊感情

- ・仲間意識

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・自ら運動する意欲

小学校教育課程

スタートカリキュラム

- B-1～3 いっしょにあそぼうよ
- D-3 じぶんたちががっこうたんけん
- H-2 ともだちといろいろなおにあそびをしよう
- K-2～3 なかよししゅうかいをしよう

小学校学習指導要領解説

- ・算数編 P54 第1学年 内容A数と計算 (1) 数の意味と表し方
- ・体育編 P29～30 第1学年及び第2学年 内容C走・跳の運動遊び (1) 技能 (2) 態度
- ・生活編 P32 内容(6) 身近なものを使って、遊びに使う物を工夫する
- ・生活編 P38 内容(9) 意欲的に生活することができる
- ・総合的な学習の時間編 P16 目標の趣旨(4) 問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること

リレー遊び① 人数を合わせないかん

2012年9月13日(木)

5歳児

事例

9月になり、子ども達は、運動会ごっこ遊びを始めました。今日は、リレー遊び。隣の野市東小学校の運動会が5月にあり、年長組も小学校の運動会に参加した。その時にリレーを見て、5月にはリレーの遊びを少ししていたが、運動会が近づいてきて、久しぶりにリレー遊びをすることになった。



①自分達でトラックの線を引き、スタートの位置を決める。ラップの芯のバトン(白とピンク)も持って来た。そして、2チーム作るためには、どうしたらいいのか話が始まる。②「並んだら分かる。並んだら分かる。」とアイコ。「人数を合わせないかん。」「同じ人数にせないかん。」とサキコ。帽子の色を変えて、同じ人数にしようとしている。3人ずつのチームになったところで、「OK!OK」となったが、そこへ3人の男の子達がやってきた。やって来た男の子を2チームに分けていると、1人足りないことに気付いたアイコ。「あと、一人、あと一人いる。」と言うが、みんなどうしていいかよく分からない。



サキコが「(わたしは)誰とやるが?」と言ったので、二人組を作ろうとする。「ちょっと、並んで。」とアイコ。それでも、なかなか決まらない。③早く走りたくなったのか、「一番最初の人?」とサキコが、手をつないで二人組になっていたレイナとハルコにバトンを渡すと、みんなで「位置についてよーい、どん。」と言って、リレーが始まった。

記録者考察

①より

「リレー遊びをしよう」と決まったら、自分たちでトラックの線を引いたり、スタートの場所を決めたり、バトンに見立てたサランラップの芯を探して来たりと、リレー遊びのイメージを友だちと一緒に共有しながら準備を進めていた。「リレー遊びをする」という目的をみんなが持ったので、それぞれ自分が分かること、できることをしていた。

②より

小学校のリレーを見たり、年中の時にリレーをやったりした経験から、リレーのイメージが子ども達の中にある。だから、自分が知っていることをみんなに伝えながら、リレー遊びができるよう考えた。同じ数にしないとリレーができないことに気づき、数を数えて合わせようとする。遊びに男の子が3人加わり、また、人数を合わせていると一人足りない。数を数えていたら、増えた時、また一から数えなければならないことに気付いたアイコは、二人組を作ったら、早いので、みんなを並べながら二人組にしたのである。

③より

なかなか人数が合わなくて時間だけがたってしまった。人数がそろったのかどうかよく分からないけれど、「とにかく走りたい」というみんなの気持ちを察してサキコは、スタートをすることにしたのである。

保育者考察

年長になり、今まで見てきた憧れのリレーができるという思いが子どもたちにあるのではないだろうか。これまでの経験から、リレーについて自分の知っていることを出し合ったが、バトンを持って走りたい思いが強かったようだ。2学期初めてのリレーなので、遊びを自分たちですすめる楽しさも味わってもらいたいと思い、子どもたちに任せ、見守った。

育てているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

・個数を比べる力

・コミュニケーション力

(思いや考えを伝え合う)

・遊びに使う物を工夫して作る力

ものを1対1対応させることによって、対応させたものの個数を比べることができる。これらの活動を通して、数の大小や順序を知り、次第に数の意味や構成について理解できる。

リレー遊びのイメージを友だちと共有するために、自分の思いや考えを伝えたり、友だちの思いや考えを聞いたりしながら、遊びを進めていく。その中で、自分の役割や責任に気づき、実行していく。

日常生活にある様々な物の中から、自分で材料を選び、遊びを工夫したり、遊びに使う物を作ったりする。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」

・第2期がっこうだいすき H-2 みんなであそぼうⅡ～ともだちといろいろなおにあそびをしよう～ 身体を動かして遊ぶことを通じて、数に親しんでいる。

・第3期みんななかよし K-2 みんなであそぼう なかよくなるⅠ～なかよししゅうかいをしよう～集会でしたいことを考えたり、友だちと仲良くなりながら集会の準備をすることができる。

小学校学習指導要領解説

算数編 P54 第1学年 内容 A数と計算 (1)数の意味と数の表し方(1)アものともとのを対応させることによって、ものの個数を比べること。

同じ数にするためには、1対1に対応させることが必要で、対応ができたなら同じ数ということが分かる。数の大小を比べることなどへ導くためには、ものともとのを対応させる活動や踏まえることが大切である。

体育編 P30 第1学年及び第2学年 内容 C走・跳の運動遊び(2)態度

走の運動遊びや跳の運動遊びに進んで取り組むこと

生活科編 P32 第1学年及び第2学年 内容(6)身近な自然を利用したり、身近なものを使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫してつくり、その面白さや自然の不思議さに気づき、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。

遊びに使う物を工夫することで、遊びの面白さに気付くことができる。

リレー遊び② 2度目のスタート

2012年9月13日(木)

5歳児

事例

順番や組み合わせもよく分からないまま、1度目は取りあえず走ってみた。走ってみたものの、やはり納得がいかないような表情をしていた。アイコが「ちょっと、1回、これでストップ。」とリレーを止めた。「並んで」と言って、二人組を作り、みんなを並べようとする。大体並んだところで、2度目のスタート。それでも、次走る人がよく分からなくても、誰かが走り、リレーを続けていた。①しかし、続けていくうちに、バトンは二つなので、スタート場所には二人が出ていること、その時、帽子の色が違うとバトンを渡す人も、もらう人もよく分かるので帽子の色が違う友だちと手をつないで並ぶこと、等が分かってきたのか、自然にリレーの形になってきていた。リレーをやりたい人も数人やってきたが、並んでいる友だちを見て、自分達で二人組になって、列に並んでいる。



②子ども達は、走ることが楽しくて仕方がない様子であった。並んでいる間も、自分のチームを応援していた。何度も何度も順番が来るたびに走っている様子を見て、ゴールテープを保育者達が用意した。テープを切ったら、2度目のリレーは終わり。子ども達は何周も走って満足をしている様子だった。

記録者考察

①より

遊びの中には、色々なルールがあり、そのルールに気が付き、ルールを守ることによって、楽しく遊ぶことができることを体験しているようだ。このような体験から、ルールを作ることの必要性やルールを守ることの大切さを様々な場面で実感していくと思われる。

②より

何度も何度も走りながら、バトンによってつなぐことを楽しんでいる子どもたちの姿が見られた。十分に体を動かす気持ちよさを体験し、自ら体を動かそうとする意欲が育っている。何周も何周も走り続けるので、保育者がゴールテープを準備した。ゴールテープを切ることで、子ども達は気持ちよくリレー遊びを一先ず終わらせることができたのである。

保育者考察

子どもたちの「リレーをしたい。」という気持ちを大切に、子どもたちで遊びをすすめることができたなら、より自分たちのものになるだろうと考え、必要な時には声をかけられる距離で見守り、子どもたちに任せてみた。これまでの経験から、帽子の色を分けた方が分かりやすいことや、二人組になって並んでいれば順番がきて走れることなど、子ども達なりにアイディアを出し合って遊びがすすんだ。走ることが楽しくてたまらない様子が見られ、充実している様子だったが、この日はまだ日差しが強く、何周も走り続けるのは心配であった。しかし、水分補給しなければならぬからと子どもたちの遊びをストップさせたくなかったため、教師は、ゴールテープを準備し、一旦ゴールして水分補給をした。子どもたちは「ゴール」したことで満足し、休憩の後また走り始めた。

育っているもの

豊かな心につながる基礎

○規範意識

- ・ ルールの理解

子ども達は遊びながらルールを理解し、一定のルールに基づいて大勢の友だちと一緒に遊ぶ経験を通して、仲間の一員としての役割意識をもって行動することの喜びを感じたり、人間関係を広げたり深めたりすることができる。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・ 自ら運動する意欲

友だちと一緒に走ることで、走る動きの面白さ、心地よさを感じ、また、みんなと走りたいという次への意欲につながっていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすきB1～3 いっしょにあそぼうよI ～うたやげえむであそぼう①②③ ～ 新しい友だちや先生と歌を歌ったり、身体を動かしたりして一緒に遊んだりすることを通して、新しい出会いを楽しむ。

小学校学習指導要領解説

体育編 P30 第1学年及び第2学年 内容 C走・跳の運動遊び(2)態度

運動の順番やきまりを守ったり、友だちと仲良く練習や競走(争)をしたり、勝敗の結果を受け入れたりする中で、生涯にわたって運動に親しみ、運動する楽しさや喜びを味わうことが大切である。

リレー遊び③ 決勝のがある

2012年9月13日(木)

5歳児

事例

2度目のリレーが終わった後の休憩時間、①アイコが、保育者に「決勝のがある。」「最後の人がかけるやつ。」と言う。保育者は、アンカータスキのことを言っていることに気が付く。保育者が、「それは、アンカータスキって言うがで。」と言った。少しして、保育者が職員室からピンクのリボンを二本持ってきた。うれしそうにアンカータスキをかけるアイコとサキコ。



アンカータスキを付けて、3度目のリレーが始まった。②先生達も一緒に走っている。アンカータスキをしたアイコとサキコは、みんなが走った後、走る。ゴールした二人を見てみんなが「同点。」と言って、3度目のリレーが終わった。

③だんだんとリレーらしくなっている。5歳児の子ども達がリレーをしているのを見て、4歳児の子ども達が、自然と列に並んでいた。

記録者考察

①より

何度も何度も走ることは、楽しいが、いつまでも終わらないことに気がつき、「アンカータスキ」の必要性にアイコとサキコは気が付いたのである。小学校で見たリレーや4歳児の時、5歳児がやっていたリレーを思い出したのだろう。日頃から子ども達のがびのびと自分を出せる環境なので、「決勝のがある。」と自分の思いを言葉にし、一步、自分の思いの実現に近づくことが出来たのである。

②より

アンカーの存在は、走ることを楽しむリレーから、次第に勝敗を意識するリレーへと変化した。自分のチームは、今相手チームに勝っているのか、最後のアンカーはどっちが先にゴールするのか、そんな意識が出てきたと思われる。それから、「どうしたら勝てるか」と考え始めるきっかけになり、グループで力を合わせていくのだろう。

③より

5歳児が楽しく走っている姿、また、先生も、一緒に走っている姿を見ることで、「楽しそう。」「やってみたい。」という気持ちになったのか、4歳児の子ども達も参加をしようと列に並んでいた。みんなが集まって楽しそうにしている場所に入っていくことで、様々な感情を共有し、様々なことを体感してくのだろう。

保育者考察

昨年、年長児のリレーを見たり仲間に入れてもらったりして走った経験から、エンドレスで走り続けるのではなく、リレーにも最後のゴールが必要ということに気がついたのだろう。アイコが自分の気付きを保育者に伝えることで、自分たちのリレーが形になってきた姿から、他の子ども達も自己実現のための自己発揮の大切さを学んでいるようだ。また、思いを受け止め援助してくれる保育者への信頼を深めている。

年中児は、年長児を見て憧れ、自分たちも仲間に入りたいと思い参加している。年長児はそれを自然に受け入れ一緒に走ったり、人数を合わせる時にはそっと声をかけてあげたりしている。こうしたかわりが、今の年中児が次に年長児になった時にいかされていくのだろう。

育てているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・自立心

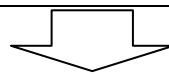
遊びや生活の中で必要と思ったことに対して、自ら働きかけたり、工夫したりすることで、自分の思いを実現していくことは、自立心を養うことになる。そのような経験を積み重ねることで、また、自分自身に自信を持つことにもつながる。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・仲間意識

リレー遊びのように、みんなで競い合う遊びを通して、子ども達は、自分のチーム・自分のグループという意識が芽生えていく。自分のチームが勝つためにはどうしたらいいのか考える中で、仲間の一員として行動することの喜びを実感できる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」

・第1期ははじめまして B-1～3 いっしょにあそぼうよ I 新しい友だちや先生と歌を歌ったり、身体を動かして一緒に遊んだりすることを通して、新しい出会いを楽しむ。

・第1期ははじめまして D-3 がっこうははじめまして I～じぶんたちでがっこうたんけん～2年生と探検した経験を踏まえ、自分たちでもう一度行きたいところへ行く。

小学校学習指導要領解説

生活編 P38 内容 (9)自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

自分にもできるんだ、もっとやりたいな という自信や意欲をもって生活できるようにすることを目指している。

体育編 P30 第1学年及び第2学年 内容(2)態度イ運動の順番やきまりを守ったり、友だちと仲よく練習や競走(争)をしたり、勝敗の結果を受け入れたりすること。

走る動き自体の面白さ・心地よさを引き出し、競走(争)に勝ったり、意欲的に運動に取り組むことができたりするように、楽しい活動の仕方や場の工夫をすることが大事である。

リレー遊び④ みんなで一緒に

2012年9月13日(木)

5歳児

事例

4度目のリレーは、4歳児の子ども達も入って、大勢でやることになった。①5歳児が、一生懸命4歳児たちを並べている。4歳児は素直に、5歳児の話を聞いている。

②5歳児同士でも、アンカータスキをしたジュンに、サキコが「最後(並ぶのが)」と教えたり、アイコが「白にして。」「赤がいっぱいで白が少ない。」と言いながら同じになるように数を揃えたりしてた。「ちゃんとまっすぐ並んで。」とアイコやサキコは、必死の様子。

何とか並び終わったのを確認したアイコが、持っていたバトンを先頭の二人に渡した。「最初の人、ちょっとここに出てきちょくが、『よーい、どん。』って言ったら、次の人がおっつて、最後の決勝でアンカーの人が行くが。」と説明をする。その後、「はい、気をつけ。よーい、どん。」と言って、4度目のリレーが始まる。

先頭の人が始動したら、2番目の人をスタート位置に呼んでくることをしていた。③1人足りなかったのか、最後のアンカーは1人で走ることになったが、二人ともゴールテープを切って、4度目のリレーが終わった。5度目も同じようにしてリレーをすると今度は、人数が揃うまくいった。アンカーがゴールテープを切ると「赤の勝ち。」と保育者。赤組の子ども達は、「やったー。」と勝利を喜んだ。



記録者考察

①より

4歳児の子ども達が入ってきたことで、5歳児と4歳児がペアを作り一緒に並ぶなどの姿が見られた。このような経験は5歳児にとって、他者とかかわることの新たな喜びと自信をもたらす。また、4歳児にとっても、5歳児の振る舞いは憧れの対象となる。4歳児はこの経験を次への生活や遊びに生かすのだろう。まねをしたり、その場特有の気分や感情を共有したりする中で、リレー遊びの楽しさや面白さを学び、来年度にこの遊びが継承されていく。異年齢との活動は、協同性の質を高めていく大事な学び合いといえる。

②より

リレー遊びを繰り返す中で、大勢になった人数を二つのグループに分けるにも、帽子の色が違う二人組を並べるとい、ということに気がついていて、スムーズに出来ていた。

③より

4度目は人数が合わなかったが、5度目は人数が揃ったので、全員でバトンをつなげることができ、この日初めて、勝敗がついたのである。最初は、なかなかリレーの形にならなかったが、自分達でどうしたらいいのか意見を言ったり、みんなを並べせたりと自分ができることをやっていた。また、ゴールテープ、アンカータスキが入ったりしたので、最終的にリレーの形になったのであった。

保育者考察

アイコやサキコは明確にやりたいことがあり、それに向かって思いを実現しようとしている。そこに仲間入りした4歳児の子ども達は、「ぼくたちも、はと組さんみたいに走りたい」という思いで、指示を聞いているのだろう。毎日、色々な遊びを楽しく展開していく5歳児に憧れ、側で見ている4歳児は、「はと組さんと一緒だと楽しい」ということを感じている様子。

5歳児達は、繰り返し遊ぶ中で、うまくいかないことや、想像通りにならないことに葛藤しながらも、自分たちで解決していこうと、試行錯誤することを楽しんでいる様子が伺える。

教師が、初めからリレーのルールを説明して始めるのではなく、子どもたちが遊びをすすめる中で、必要を感じるルールがうまれている。そして、そのルールをお互いに守ることで遊びがスムーズにすすむことを感じ始めたところだろう。

リレーの形で遊びが進み始めたこの頃、それまでは側で見ている年中児を仲間に入れて遊びが盛り上がり、互いに昨年までの経験を元に真剣に遊びに取り組む姿が見られた。この姿は、自園の特徴的な場面であり、大切にしていきたい。

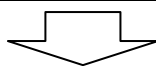
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

・協同性

リレー遊びを通し、『仲間(チーム)』の存在に気付くことができている。遊びの準備やチーム分けを通して、自分たちで問題を解決し、仲良く遊ぶ姿から、一つの遊びをみんなで作って上げていく遊びをしている。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし K-2~3 みんなであそぼう なかよくなるう I ~なかよししゅうかいをしよう~ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむこと

小学校学習指導要領解説

体育編 P29 C走・跳の運動遊び(1)技能 ア走の運動遊び

距離や方向などを決めて走ったり、手でのタッチやバトンをパスする折り返しリレー遊びをしたりすること。

総合的な学習の時間編 P16 目標の趣旨(4)問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること

友だちと協同して取り組むことで、学習活動が発展したり課題への意識が高まったりする。

ドッジボールをしよう

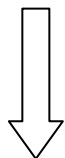
1 体を動かして遊ぶ楽しさやみんなで力を合わせる喜びを味わう

11月頃～3月

5歳児

子ども達は、4歳児の時には、その当時の5歳児と一緒にドッジボールをしたり、5歳児になってからも円形ドッジを楽しんだりしていた。11月7日からクラスのみんなで、ドッジボール遊びが始まった。始めはルールがよく分からなかった子ども達も、毎日ドッジボールをしているうちに、ルールも理解し、自分たちでドッジボールを楽しむようになっていった。

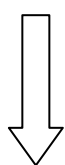
11/15



ドッジボールは同じ人数で始めるということが理解できているので、子ども達は、人数を数え、だいたい同じ人数になるように自分たちで調整している。



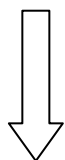
11/15



遊びのルールには、自分の意思にかかわらず従わなければならないが、友だちと楽しく遊ぶためには、守らなくてはならないことがあることに気付くことができる。時には、相手チームにとって有利になったとしても、公正に判断し、相手に伝えることができるようになってくるのである。



12/5



ドッジボールをする中で、人数の差に気付き、同じにしようとする子ども達もいる。遊びの中で、数の大小、多少の比較をしているのである。



3月
まで
続く

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

・協同性

○学びの芽生え

・個数を数える力

・個数を比べる力

・数量の差を求める力

豊かな心につながる基礎

○規範意識

・ルールの理解

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

・身体を動かす喜び

小学校教育課程



スタートカリキュラム

B-4 いっしょにあそぼうよ

F-4 がっこうのことをもっとしりたいな

H-1～2 みんなであそぼうよ



小学校学習指導要領解説

- ・算数編 P54 第1学年 内容A数と計算(1) 個数や順番を正しく数えたり表したりすること
- ・算数編 P59 第1学年 内容A数と計算(2) 加法、減法
- ・体育編 第1学年～第4学年 内容E「ゲーム」
- ・体育編 第5学年及び第6学年 内容E「ボール運動」

多いやん ～ドッジボールをしよう①～

2012年11月15日(月)

5歳児

事例

子ども達は今までにも、円形ドッジを楽しんだり、4歳児の時には、その当時の5歳児と一緒にドッジボールをしたりしていた。

11月7日からクラスみんなでドッジボールを始めた。始めはルールがよく分からなかった子ども達も、毎日ドッジボールをしているうちに、ルールも分かり、自分たちでできるようになってきていた。

今日も、朝早く、登園したマサキとヒロシとマサヒコがボールの投げ合いをしながら、コートで友だちを待っていた。①ユウジ、ジュンがやって来ると、「紫の外野やって。」「黄色の外野こっちで。」帽子の色(紫と黄)で次々とチーム分けしながらドッジボールをしている。②保育者も入ってみんなと楽しんでいた。



保育者が靴を履きかえるため離れた。ドッジボールの上手なアキコが来ると、「アキコちゃん、黄色になって。」とマサキが言う。「分かった」とアキコが黄色の帽子をかぶると、③「多いやん。」の声。「1, 2, 3, 4」と人数を数えると、黄色チームは4人。紫チームは3人だったが、「M先生が紫。」ということで、4人対4人で同じ人数になったが、「M先生黄色チームにおる」とジュン。M先生は、黄色チームだったことに気付いたので、やっぱり人数が合わない。保育者が戻ってくると、「M先生紫になって。」とアキコ。これで人数が合う。そこへ、セイヤがやってきて、「紫になっちゃおうか。」と言う。これで子どもの人数が合い、ドッジボールを続けた。その後も次々やってくるが、だいたい同じ数になるように自分たちでチームを分けていた。

記録者考察

①より

朝早くから「みんなとドッジボールがしたい。」という思いで登園し、園庭に出てくる子ども達。ドッジボールはだいたい同じ人数で始めるということが分かっているので、子ども達は、コートに来た順に、帽子の色を替えながら、それぞれのチームに分かれていた。

②より

保育者も一緒にドッジボールを楽しんでいた。上手にボールを投げたり受けたりする保育者の存在は大きく、「あんなに上手に投げたい。」「速いボールを受けたい。」と自分たちの身近なお手本になっているのである。時に、保育者にボールを当てたり、保育者の速いボールを全身で受けたりすることは、子ども達にとって大きな自信となっていくのである。

③より

奇数の人数で遊んでいる時には、次に来た子は、人数が少ないチームに入ってもらうなど、いつも同じ人数になるようにしていることが分かる。また、途中で人数が合わないことに気付くと、「(人数が)多い。」と言葉に出し、みんなが納得できるように、数を数えて確認をすることもある。このように、人数を数える経験を通して、人数が均等になる場合(偶数)と均等にならない場合(奇数)があることを知り、どうしたらよいかの知恵をつけていくのである。

保育者考察

「去年のほとさんみたいに線ひいてドッジやりたい」と始まったドッジボール、年中の時に年長を見て憧れ、仲間に入れてもらい一緒に遊んだ経験をもとに遊びが始まっている。後から入ってきた子どもは、帽子を言われた色に替えてすぐに参加してことから“みんなでドッジボールをしたい”とにかくやりたいという思いが伝わってくる。この頃の子ども達はルールをある程度理解し自分たちで遊びが進められるようになって楽しくてたまらない時期であり、人数が増えるとより楽しくなることもわかっていると思われる。人数の差やルールについて意見が出てゲームが中断することもあるが、自分の考えや気持ちを言葉で伝え合い、皆が納得すると遊びが再スタートしている。その話し合いに時間を要することが“もったいない”といった雰囲気やテンポよくゲームが続いている。

クラスのほとんどの子ども達が参加し毎日繰り返されているこの遊びを繰り返すことで、ルールや人数の調整など集団での遊びに必要な要素などを学び、自分たちで遊びを築いていくだろう。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・協同性

ものの個数を数えようとするとき、数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱えていくことで、個数を表すことができる。また、表した個数を比べ、数の大小を理解することができる。

○学びの芽生え

- ・個数を数える力
- ・個数を比べる力

チーム分けをし、人数を合わせ、みんなで「ドッジボールをする」という目的に向けて、子どもたちが考えたり、工夫をしたりして、協力の仕方を学んでいる。

小学校教育課程



スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第2期がっこうだいすき F-4 がっこうのこともっとしりたいなII～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中にあるものの数や数字に関心をもち、学校の中のいろいろなものの数を数えたり、数字を探そうとする。

小学校学習指導要領解説

算数編 P54 第1学年 内容 A数と計算(1)イ個数や順番を正しく数えたり表したりすること ウ数の大小や順番を考

えることによって、数の系列を作ったり、数直線の上に表したりすること。
ものの個数を比べようとするときは、まず、ものの個数を数える。数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に「いち、に、さん・・・」という数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱え、対応が完成したときの最後の数によってものの個数を表し、個数の大小によって判断する。

当たってない。ワンバウンドした ～ドッジボールをしよう②～

2012年11月15日(月)

5歳児

事例

晴れの日、毎日朝からドッジボールをする子ども達。この日も、朝から人が集まり、ドッジボールも盛り上がっていた。



① アイコがボールを一度受けたが跳ね返ってしまった。アイコはボールに当たったと思って、外野に出ようとする、相手チームのアキコが「当たってない。ワンバウンドした。」と言う。ワンバウンドして当たっても、外野に出なくていいというルールがあり、アキコはアイコに教えたのだった。

② 2度目のゲームが終わり、3度目のゲームが始まった。新たにチームを分け、始めようとする、「外野、外野。」と外野に誰もいないことに気付いた。ハルコが外野にいき、外野に人がいることを確認した後、試合を始める。

③ アキコ一人が外野にいて、マサヒコを当てた。「アキコちゃん、入れるで。」とセイヤが声をかけたが、「中の人当てられたら。」と答えゲームを続ける。少しして、自分のチームの一人が外野に出た。「アキコちゃんが入れる。」とセイヤ。それを聞いて、アキコも中に入った。

記録者考察

①②③より

子ども達は繰り返し遊ぶ中で、次第に遊びのルールを理解している。遊びのルールは、自分の意思にかかわらず従わなければならない要素もあるが、友だちと楽しく遊ぶためには、守らなくてはならないことがあることに気付くことができるのである。相手チームでも、ワンバウンドでボールに当たったことに気付けば、きちんと「当たってない」と公正に判断し、相手に伝えることができていた。始めに外野がいなくてゲームを始めることができないことや、ゲームの途中でも外野がいなくて困るので、内野に入ることができても、外野にいるなど、子ども達が自分で判断しながら、ドッジボールの遊びを続けていることがよく分かった。

子ども達は、大好きなドッジボールを通して、友だちとかかわる楽しさ、一緒に動く心地よさ、友だちの動きに対応して考えたり動いたりする面白さを味わっているのである。

保育者考察

子ども達は“とにかくドッジボールが楽しい”という時期で、当てられると悔しがったり外野から友だちを当てることができると「ヤッター」と喜んでコートに戻ったりしている。下線①のように相手チームのことであってもきちんとルールに従ってアドバイスしていることから、ルールをきちんと守って遊ぶことが楽しさにつながっていると思われる。ドッジボールのなかで、思ったことや自分の気持ちを言葉に出して伝えコミュニケーションをとりながら遊ぶことで友だち同士認め合う関係も育ってきている。

この遊びのなかで、自分たちで遊びをすすめることや、自分の気持ちを言葉で表すこと、楽しく遊ぶためには自分の気持ちに折り合いをつける必要がある場合もあることを経験している。また、全身を使ってボールを勢いよく投げることやボールをかわすこと、俊敏にコートの中を動いて逃げるなど、様々な体の動きもみられる。

育っているもの

豊かな心につながる基礎

○規範意識

- ・ ルールの理解

子ども達は、最初はルールが理解できず、いざこざを重ねていくかもしれない。しかし、繰り返し遊ぶ中で、友だちと一緒に遊ぶ喜びや、そのためには守らなくてはならないことがあることに気付き、一定のルールに沿って動いたり、仲間の一員として動いたりすることの楽しさが感じられるようになっていく。

体力・健康につながる基礎

○体力・安全

- ・ 身体を動かす喜び

友だちと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地良さを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。

小学校教育課程



スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」

- ・ 第1期はじめまして B-4 いっしょにあそぼうよⅡ～こうていのゆうぐであそぼう①～ 遊具遊びに進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、場の安全に気をつけようとしたりする。
- ・ 第2期がっこうだいすき H-1 みんなであそぼうよⅡ～ともだちといろいろなおにあそびをしよう～身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組もうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

体育編 第1学年～第4学年 内容Eゲーム、第5学年及び第6学年 内容Eボール運動

ボール運動は、ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。また、公正に行動する態度、特に勝敗をめぐって正しい態度や行動がとれるようにすることが大事である。

紫が少ない ～ドッジボールしよう③～

2012年12月5日(水)

5歳児

事例

いつものようにみんなでドッジボールをしていた5歳児たち。
 ユリがあることに気がつき、アイコに言った。①「紫は、6人やけど、黄色は8人で。紫が少ない。」ミエは、自分の紫色チームが、相手の黄色チームより人数が少ないので、同じ人数にしなければならぬと思ったのだった。記録者が数えてみると確かにミエが言った数と同じであった。アイコは、「先生が紫に入ってくれるって言いよったで。」と答えた。でも、まだ、保育者は、加わっていなかった。アイコとミエと一緒に、保育者のところへ言いに行った。保育者に説明するアイコ。②ミエは、保育者に、「二人。」と言う。8人と6人とでは、2人人数が合わないことに気付いていた。



記録者考察

①より

ミエは、ドッジボールは、同じ人数に分けないといけないというルールを理解していた。また、「こっちは大勢いるけど、こっちは少ない」というように数えなくても瞬間的に判断できるくらい偏っていたわけではなく、一見同じくらいに見える人数であった。しかし、ミエは、人数が違ふと気づき、実際に数えてみたのだろう。数えてみると、確かに8人と6人で人数が違ふことに気がついた。そこで、アイコに言ったのだ。

②より

ミエは、8人と6人では、2人の違いがあることに気付いている。つまり、「引き算」という意識はなくても、二つの数量、この場合は、8と6の差が2であることを理解しているのである。小学校の1年生の1学期には、「8-6」の計算や計算の表記の仕方を学習する。ミエを含め子ども達は、小学校で習う計算を学習していなくても、遊びや生活の中で、計算そのものはある程度できていることが分かる。幼児期に、ものを数える機会を多くしたり、大小、多少の比較の機会を増やしたりすることが、算数の基礎として重要ではないだろうか。

保育者考察

これまでドッジボールをしてきた中で、保育者はあまり人数についての発言をしてこなかった。始まったばかりの頃は「人数を合わさないかん」という子どもの意見に付き合い、一緒に数えたり同じ人数になるように友だちを誘ったりしていたし、保育者自身も“同じ人数で遊ぶもの”という感覚だった。しかし、毎日遊ぶうちに、子ども達は人数の差を気にしなくなっていることに気がついた。遊び始める時には「僕は紫になる」「じゃあ私は黄色」などとだいたい同じ人数になるように分かれて始まり、後から参加する子ども達は人数の少ない方に仲間入りするなど、1人～2人の差は気にしておらず、それよりも1分でも長くドッジボールをしたいという様子だった。

ミエの人数にこだわった様子から、人数の差に気づき、人数の多いチームが有利であるということにわかっていることがうかがえる。

育っているもの

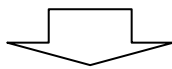
確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・ 個数を数える力
- ・ 数量の差を求める力

ものの個数を数えようとするとき、数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱えていくことで、個数を表すことができる。

表した個数を比べ、数の大小を比較することによって、その二つの数量の差を求めることができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第2期がっこうだいすき

- ・ F-4 がっこうのこともっとしりたいなⅡ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中にあるものの数や数字に関心を持ち、学校の中のいろいろなものの数を数えたり、数字を探そうとする。
- ・ H-2 みんなであそぼうよⅡ～ともだちといろいろなおにあそびをしよう～ 身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、大小をくらべたりする。

小学校学習指導要領解説

算数編 第1学年 内容 A数と計算

P54(1)イ個数や順番を正しく数えたり表したりすること ウ数の大小や順番を考えることによって、数の系列を作ったり、数直線の上に表したりすること。

ものの個数を比べようとするときは、まず、ものの個数を数える。数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に「いち、に、さん・・・」という数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱え、対応が完成したときの最後の数によってものの個数を表し、個数の大小によって判断する。

P59(2)加法、減法 ア加法、減法が用いられる場合とその意味






具体的な場面について、児童が同じ加法や減法が適用される場として判断することができるようにすることが大切である。

友だちとのかかわり 1 身体を動かして遊ぶ楽しさやみんなで力を合わせて喜びを味わう

1～3月頃

5歳児

友だちとの関係が深まってくると、共通の目的をもって活動することの楽しさやルールの必要性が分かってくる。時には、なかなかうまく遊べずいざござになることもある。こうしたいざござを重ねながらも、繰り返し遊ぶ中で、子ども同士のかかわりが育っていく。

2/7 ↓	ドッジボールの組分けで、相手チームに力の強い人が集まっていることに気付く。組分けをやり直したいと提案する。	
2/7 ↓	ボールの取り合いから、相手の思いに気付いたり、自分の気持ちを調整したりしている子どもたち。自分の気持ちに折り合いがつけられ、またみんなと一緒に遊びを始めることができる。	
2/7 ↓	ボールが当たって泣きそうになったが、相手の気持ちに気付いたり、仲良しの友だちに思いを受けとめてもらったりすることにより、自分の気持ちを立て直し、また、一緒に遊ぼうとする。	
2/13 ↓	みんなで遊んでいるとルールを共通にする必要性に気付く。その時、一緒に話し合いを行ったり、みんなでルールを工夫したりしながら、遊びを進めることができる。	
2/14 ↓	「こおりオニ」をするために、友だちに声をかけ、遊びに誘う。最初はなかなか人が集まらなかったが、少しずつ、集まりだした。最後は、3、4歳児も含めて、総勢約20名で「こおりオニ」が始まった。	

育っているもの

確かな学力につながる基礎 ○学びを支える基礎 ・協同性	豊かな心につながる基礎 ○規範意識 ・ルールの大切さについての気付き ・ルールの工夫 ・不公平さについての気付き ○自尊感情 ・相手の思いについての気付き ・相手を思う気持ち	体力・健康につながる基礎 ○健康・安全 ・身体を動かす喜び ・自ら運動する意欲
--	---	---



スタートカリキュラム

- B-4 こうていのゆうぐであそぼう
- H-1 ともだちといるいろなおにあそびをしよう
- K-2～3 なかよし集会をしよう



小学校教育課程

- ・体育編 第1学年～第4学年 内容E「ゲーム」
- ・体育編 第5学年～第6学年 内容E「ボール運動」
- ・道徳編 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点
 - P40 1主として自分自身に関すること (3)
 - P43 2主として他の人とのかかわりに関すること (3)
 - P45 4主として集団や社会とのかかわりに関すること (1)

言いたい

2013年2月7日(木)

5歳児

事例

ドッジボールをしていた5歳児たち。1回目のゲームが終わったので、2回目のゲームを始めることにした。自分たちで好きな方のコートに行きチーム分けをした。

ナオコは、片方に力の強い男の子が集まったことに気がつき、「向こうのチームに、男の子が固まっている。」と保育者に言った。保育者は、ナオコの気持ちを聞いた。保育者がそばにいる中で、ナオコは、チーム分けをもう一回したいことをみんなに伝えることにした。②ナオコの気持ちを聞いた力の強い男の子たちが、「そしたら、グーパーでジャンケンをして、チーム分けし直そう。」と言い、もう一度チーム分けをすることになった。



記録者考察

①より

ドッジボールの組分けで、不公平さに気付いたナオコ。力が同じぐらいのチームで勝ち負けを争うことが楽しいドッジボールで、明らかに力の差があると、遊んでいても面白くない。ナオコは、このままで遊ぶことに納得がいかなかった。そこで、自分の気持ちを保育者に訴えたのであろう。

②より

保育者の援助のもと、自分の気持ちをみんなに伝えたナオコ。力の強い男の子たちは、自分たちが一緒にチームになると勝つのでうれしいとは思いますが、みんなとドッジボールを続けたいという思いもあったので、「公平に組分けをしたい」というナオコのルールを受け入れたのである。ルールを守ると仲よし同士、力の強い者同士で一緒にチームになれず、我慢しなければならぬが、楽しく長く遊びや雰囲気を持続していくことができると考えたのだらう。

保育者考察

1回目で負けていたナオコは、2回目のチーム分けをしたとき、相手チームに力の強い男児が集中していることに気付くと、不満そうな表情を浮かべながら保育者を見ていた。保育者が声をかけると、「チームに力の差があること、また負けてしまうかもしれない、もう一度チーム分けをしたい」という気持ちを話し出した。ナオコの発言は周りにいた友だちにも聞こえていたと思うが、強いチームにいた子どもたちは、自分たち優位で試合が進んでいくことを予想していたのだらう。なかなかナオコの思いを聞き入れようとせず、黙ったまま保育者とナオコのやりとりを聞いていた。せつかくのナオコの思いを、いっしょに遊んでいる友だちにも気付いて欲しいし、一緒に考えていって欲しいと思ひ、周りの友だちにも伝えてみるよう保育者は声をかけた。ナオコは、保育者に気持ちを伝えたことで、「自分の気持ちを伝えてもいいんだ」という勇気が出たのではないのか。ナオコの思いを聞いた相手チームのミノルが、「もう一度組み分けをしよう」と周りに提案すると、腕に自信のあるタロウが「じゃ、おれとマサヒトは分かるようにしようぜ」と二手に分かれた。そして、子どもたちなりに、力が分散するように考えたチームができると、ナオコに確認をしていた。ナオコも安心したように頷き、納得したようだった。話し合いの時間はかかったが、どうすればいいのか自分なりに思ったことを伝えたり、友だちの思いに耳を傾けたりしようとする姿から、「もっとドッジボールをやりたい」「みんなで早くやろう」という遊びへの強い気持ちがあつたのではと考察する。トラブルがあつたり遊びがうまく進まないこともあるが、みんなで楽しく遊ぶためにはどうすればいいのかを、自分の思いを伝えたり、友だちの気持ちを受け入れたりして遊ぶことを繰り返しながらより協同に向かって遊びが進めていけるようになるのではと考える。

育てているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・協同性

ルールのある遊びの中で、互いの言動や気持ちを認めて受け入れるような、友だち同士のかわりを通して、仲間とつながる喜びを実感していく。

豊かな心につながる基礎

○規範意識

- ・不公平さについての気付き

グループで遊ぶようになると、遊びの中で、公正さという問題に突き当たる。正しくないことや、ずるいことに気付いたら、指摘したり、改善したりしていくことでもっと楽しく遊ぶことができる。

○規範意識

- ・ルールの大切さについての気付き

友だちとの一緒に遊びを楽しみ、遊びのルールを作り、それを守って遊ぶことの面白さを十分に体験することで、遊びのルールを守ろうとする気持ちを持つことができる。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・身体を動かす喜び

友だちと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地良さを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元 「いちねんせいになったよ」

・第1期ははじめまして B-4 いっしょにあそぼうよⅡ～こうていのゆうぐであそぼう①～ 遊具遊びに進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、場の安全に気をつけようとしていたりする。

・第2期がっこうだいすき H-1 みんなであそぼうよⅡ～もだちといろいろなおにあそびをしよう～身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組みようとしていたりする。

小学校学習指導要領解説

道徳編

・P40 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 1主として自分自身に関すること(3)よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。

人としてやってよいこと、してはならないことをしっかりと区別、判断できる力を養うとともに、おかしいと思つたことに気付いたり、よいと思つたことは、遠慮しないで進んで行ったりすることができることが大事である。

・P45 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 4主として集団や社会のかかわりに関すること(1)約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にす。

身近な社会生活における出来事なども取り上げながら、約束やきまりをしっかりと守る態度を育てることが大切である。

体育編 第1学年～第4学年 内容Eゲーム、第5学年及び第6学年 内容Eボール運動

ボール運動は、ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することに楽しさや喜びを味わうことができる運動である。また、公正に行動する態度、特に勝敗をめぐって正しい態度や行動がとれるようにすることが大事である。

ボールの取り合い

2013年2月7日(木)

5歳児

事例

ドッジボールで、マサヒトの投げたボールを外野にいたミノルとミサトが同時に取り、①2人でボールの取り合いになった。お互いボールを離そうとしない。周りから、「ミノルのボール。」「ミサトちゃん、ミノルボール。」という声が出た。周りの友だちはミノルのボールだと主張していた。ボールを離そうとしない2人の所へジンとアキヒロが行き、ボールからミサトの体を離し、ボールを持ったミノルが投げた。②その瞬間、ミサトはうずくまって大声で泣き出した。保育者がミサトのそばに行って、声をかけた。③ミノルもミサトと保育者のそばに来て座った。ミノルは、困ったような顔をしているように見えた。ジンやトシヒコもそばに来た。保育者がミサトに話をしているのを、ミノルとジンとトシヒコがそばで聞いていた。保育者とミサトの二人だけになり、ミサトはしばらく泣いたが、④泣きやんだ後、また、ドッジボールに参加した。



記録者考察

①より

お互い自分の思いが強いと、双方が主張を譲らず、物の取り合いになることがある。ミサトは、ボールを取って投げたかった。ミノルも同じようにそうしたかった。つまり二人とも、自分のやりたいことが明確になり、主張できるようになっているのである。

②より

周りからもミノルのボールだと言われたり、ボールを取り上げられたりしたことで、ミサトは、悔しくて大声で泣いてしまったのだろう。自分の思いが通らなかつたことを、ミサトは「泣く」ということで表現したのかもしれない。

③より

ボールを取って投げるといふ思いを達成することができたが、そのために、ミサトは泣いているという事実をミノルは受けとめ、ドッジボールの続きをしないで、ミサトのそばに来たのかもしれない。しかし、どうすることもできなくて、戸惑っているように見えた。

④より

ミサトは、自分の思った通りにいかないというつらさを経験したが、保育者の声がけや、ミノルたちが自分のそばに来てくれたことにより、自分なりに納得したのかもしれない。だから、ボールを取られて悔しい気持ちがありながら、自分の気持ちを抑制し、気持ちを切り替えて、ドッジボールに参加したのかもしれない。

保育者考察

ゲームが始まると「自分がボールを持ちたい、投げたい」という気持ちが強く、いつ自分のもとにボールが転がってくるのかドキドキしながら待っている子どもたち。今回の事例では、2人とも自分のボールだと主張したが、周りの友だちの「ミノルボール！」の声にミサト自身も後に引けない悔しきや、腹ただしい気持ちがあったのではないだろうか。お互いの「やりたい！」という気持ちが伝わったので、「2人とも、ボール投げたかったね」と両方の気持ちを受け止められるように声をかけた。周りの友だちも2人の様子が気になり、コートから出てきて声をかけていたので、子ども同士で話し合いをする機会にしようかとも思ったのだが、ミサトの気持ちが落ち着くのは時間がかかりそうだなという思いとせっかくな盛りが上がっているゲームが中断するのではないだろうかという思いで、保育者が話を聞くことにした。初めは保育者の声も耳に届かない様子のミサトだったが、「くやしかったね」と受け止めると涙が止まった。自分の気持ちを分かってもらえたことで安心したのだろう。少しずつ気持ちも落ち着いてきたので、試合の様子を2人で見ながらボールに触りやすいポジションをさりげなく知らせているうちに、再びゲームに参加したい気持ちへと切り替わっていったように感じた。泣いているミサトを見たミノルは、なんて言葉を掛ければいいのか、自分はどうすればいいのか悩んで困っている様子に見えた。少しの間ミサトの様子を見ていた。ミノルは、「ごめんよ」と声をかけ、コートに戻っていった。ミノルの一言もミサトが気持ちを切り替えることができた一つの要因だったのではないだろうか。ミサトがゲームに戻りやすいように「ミサトちゃん、復活〜!!」と保育者がみんなに聞こえるように声を掛けると、「ミサトちゃん、パス!」と同じチームの友だちがボールを回してあげる姿が見られ、周りの友だちが自然とミサトの気持ちを受け入れていると感じた。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・協同性

ルールのある遊びを通して、友だちとかわる楽しさ、一緒に動く心地よさ、友だちの動きに対応して考えたり動いたりする面白さなどを味わい、協同的な関係を築くことができる。その中で、相手の気持ちに気付いたり、自分なりに納得できたりした時、自分の要求や感情を抑えることが必要なことに気付き、自己を抑制する力がついていく。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・相手の思いについての気付き

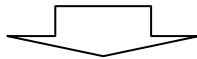
幼児期は、自己中心性があり、友だちの立場を理解することは、難しいことも多いが、少しずつ、自分の視点からだけでなく、相手の視点からも考えられるようになる。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・身体を動かす喜び

友だちと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地よさを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」

- ・第1期ははじめまして B-4 いっしょにあそぼうよⅡ〜こうていのゆうぐであそぼう①〜 遊具遊びに進んで取り組み、きまりを守り仲良く運動したり、場の安全に気をつけようとしたりする。
- ・第2期がっこうだいすき H-1 みんなであそぼうよⅡ〜ともだちといろいろなおにあそびをしよう〜身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組もうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

道徳編 P43 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかわりに関すること(3)友だちと仲よくし、助け合う。

よい友だち関係を築くには、互いを認め合い、学習活動や生活の様々な場面を通して理解し合い、協力し、助け合い、信頼関係や友情をはぐくんでいくことが大切である。

体育編 第1学年～第4学年 内容Eゲーム、第5学年及び第6学年 内容Eボール運動

ボール運動は、ルールや作戦を工夫して、集団対集団の攻防によって競争することを楽しんだり喜びを味わうことができる運動である。また、公正に行動する態度、特に勝敗をめぐる正しい態度や行動がとれるようにすることが大事である。

ごめん

2013年2月7日(木)

5歳児

事例

ドッジボールをしていた5歳児の所に、サッカーのボールが転がってきた。マサヒトは、自分の足元に転がって来たので、コートの外にボールを蹴ったところ、外野にいたアキヒロの体に当たった。アキヒロは、今にも泣きそうになった。マサヒトもそのことに気付き、手をポケットに入れたまま、その場所からアキヒロの方を向いて「ごめん。」と言った。しかし、①アキヒロは、泣きそうな顔でじっとマサヒトを見ていた。マサヒトの近くにいたトシヒコがマサヒトに向かって、「泣きゆうで。」とアキヒロの方を指さした。②マサヒトは、ポケットに手を入れたまま、アキヒロのそばに行き「ごめん。」と言った。アキヒロは、しばらくそのままじっとマサヒトを見ていた。そこへ、アキヒロと仲良しのコウジが二人のそばに来た。少しして、アキヒロは涙を袖で拭くと、またドッジボールに参加をした。



記録者考察

①より

アキヒロが泣きそうになっているのを見て、謝ったマサヒト。しかし、ポケットに手を入れたまま、遠くから謝ったことに納得がいかなかったのかもしれない。また、アキヒロは、思いっきり泣きたかったかもしれないが、マサヒトの方をじっと見ることで何とか泣かずに我慢しているようだった。

②より

マサヒトも自分のせいでアキヒロが泣きそうになっているということは理解している。しかし、優しく謝ることはできなかった。トシヒコの言葉でアキヒロの近くに行き、もう一度、ポケットに手を入れたまま謝った。アキヒロも、ポケットに手を入れたまま謝るマサヒトの態度を見て、すぐには納得できなかったようだ。しかし、マサヒトが自分のそばに来て謝ってくれたこと、コウジも心配そうな様子で来てくれたことで、気持ちを立て直すことができたようであった。

保育者考察

普段はあまりドッジボールには参加しないアキヒロ。この日は、保育者が遊びに誘ったことや周りの友だちが楽しそうに遊んでいる姿にアキヒロ自身も魅力を感じ遊びに参加していた。嫌なことがあるとすぐに挫けて大声で泣くことがあったアキヒロが、「ボールが当たっていやだった」という思いや「わざとにしたわけではないから許してあげようか」という思いなどから自分の心との葛藤があったのではないかと考える。また、マサヒトの態度や言い方から「もっとちゃんと謝って欲しい」という思いもあったかもしれない。状況をよく見ていたコウジは、アキヒロのことが心配になり、気持ちを分かちあげようという思いで2人の側に行ったのではないかと考える。また、アキヒロはコウジが来た後、再びドッジボールを始めたのは、自分の気持ちをくんでくれたコウジの言葉があったのではないかと考える。アキヒロが気持ちを立て直したのには、友だちの存在も大きかったと思うが、また、参加したのは、「ドッジボールをやりたい」という強い気持ちがあったからではないだろうか。

マサヒトは、「悪かった」という思いを素直に伝えたい気持ちと、謝ったけど許してもらえないかもしれないという不安な気持ちが、ぶっきらぼうな態度になったのではないだろうか。不器用でも一人一人の子どもなりに感じたこと、思ったことを友だちに伝えたり、気持ちが通うように相手に歩み寄ろうとしたりする姿だったように思う。そして、遊びや生活の中で子どもたちは自分の気持ちに気付いてくれる、分かってくれるということを感じ、一緒に遊ぶ仲間を受け入れようとするのではないかと考える。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・協同性

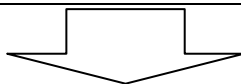
相手の気持ちに気付いたり、自分なりに納得できたりした時、自分の要求や感情を抑えることが必要なことに気付き、自己を抑制する力がついていく。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・相手の思いについての気付き

幼児期は、自己中心性があり、友だちの立場を理解することは、難しいことも多いが、少しずつ、自分の視点からだけでなく、相手の視点からも考えられるようになる。



小学校教育課程

小学校学習指導要領解説

道徳編 P43 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかわりに関すること(3)友だちと仲よくし、助け合う。

よい友だち関係を築くには、互いを認め合い、学習活動や生活の様々な場面を通して理解し合い、協力し、助け合い、信頼関係や友情をはぐくんでいくことが大切である。

ルールを作る

2013年2月13日(水)

5歳児

事例

ショウ、ゴロウ、カナカ、ナオコ、シズカ、そして保育者2名の7人がオニになって、「こおりオニ」をしていた。オニを4人から7人に増やしたのに、いつまでたっても、終わらないことに気付いたオニたち。①オニにタッチされて「こおり」になったら、誰かにタッチされるまで動かず、立ったまま動いてはいけないルールであるが、このルールをみんなが守らなくなり、「こおり」になった者同士が動いて、タッチし合い、生き返っていたので、いつまでたっても「こおり」が増えず、オニがずっと走り続けなくてはならなくなっていた。



②保育者が、みんなを集め、もう一度ルールを確認し合った。③その時ナオコが、「手をつないだ二人をタッチしたら、二人とも『こおり』になる。」と新しいルールを提案した。ミナミも、「ジャングルジムに上るのはこわいき、やめよう。」と提案する。保育者が二人の提案したルールをみんなに確認をしたところ、みんなも賛成した。全員が再度ルールを確認した後、もう一度、「こおりオニ」をみんなですることにした。

記録者考察

①より

最初は、共通のルールのもと楽しく遊んでいたのだが、数名が、自分たちでルールを解釈して遊びだしたので、みんなで一緒に楽しく遊ぶことができなくなってきた。大勢で遊ぶ遊びは、ルールが共通でないと遊びが面白くなっていくのである。

②より

保育者は、子どもたちそれぞれがルールの解釈をし始めたので、ここでルールを共通にする必要があることに気付き、仲介する援助を行った。

③より

二人は、遊んでいる中でおそらく、「こんなにしたらいい。」ということに気付いたのであろう。だから、ルールを確認する時に、提案をしたのだろう。ルールのある遊びには、基本的な遊び方やルールがあるが、変えていく必要性があったり、変えた方が面白かったりする時もある。子どもたちが遊びを自分たちのものにしていくために、子どもたちから出た提案を、保育者は、みんなに投げかけたのだろう。

保育者考察

初め遊んでいた人数から次第に増えたことで、ルールがあやふやになったところもあったが、鬼にタッチをされないように様子うかがいながら逃げるスリル感や、つかまって氷になっても仲間が助けに来てくれるという逃げる者同士の気持ちのつながりの楽しさがあったから遊びが長く続いていたのではないと思う。しかし、鬼の中にはなかなかつかまえられることから嫌になりあきらめようとする姿が見られ始めていたため、もう一度みんなでルールを確認する場を作ることにした。

逃げる人数が増えなかなか捕まえられることを改善しようと、鬼側から「守り」のルールの提案があった。しかし、逃げる側の子どもは守りがあるとすぐにつかまって生き返ることができないから守りはなしがいいと主張した。保育者は両方の言い分を尊重し、どうすればお互いの意見を取り入れることができるかを子どもたちにも投げかけ、一緒に考えることにした。話し合いの結果「守りをする時は、鬼は1人ですること」という新しいルールを付け足すことに決まった。これまでも1つ新しいルールが決まると、「こんなルールがあるといいのではないか」という考えを周りの友だちに伝えていく経験をしてきた。「先生が決めたルール」ではなく子どもたちが「自分たちで考えた」ということが守って遊ぼうという気持ちにつながるのではないかと考える。また、自分の能力に自信のある子どもは「新しいルールが増えて、どんなふうになるのかな?」「新しいルールは楽しそうだな」と感じて、新しいルールをこなしてみせよう!という意欲が見られた。ルールが加わったことで、今までよりも少しレベルアップしたような状況を子どもたちと一緒に作っていくことができたように思う。また、手をつないで逃げたときのルールをナオコが提案したことで、にげる側の子どもたちで「ペアになるう」と友だちと手をつないで逃げあう姿が見られ始めた。手をつないでいることでタッチされやすくなるのだが、鬼にタッチされそうになると「1回はなれよう」と言って手を離し、鬼から逃げ切ることができるのもう一度手をつなぎなおしたりして、友だちと一緒にスリルを味わう楽しさが増したように思う。

育っているもの

確かな学力につながる基礎 ○学びを支える基礎 ・協同性	それぞれの思いやこだわりを伝え合うだけでなく、友だちとやり取りをしながら新しいアイデアや遊びのルールを生み出し、それを互いに受け入れ合う中で、協同的な関係が出来てくる。
豊かな心につながる基礎 ○規範意識 ・ルールの工夫	大勢で遊ぶには、共通のルールが必要になってくる。ルールがバラバラだと、遊びが続かなかったり、遊びが面白くなってしまったりする。そこで、自分たちで、ルールを工夫したり、ルールを新しく決めたりしながら、遊びを広げていく。
体力・健康につながる基礎 ○健康・安全 ・身体を動かす喜び	友だちと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地良さを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第2期がっこうだいすき H-1 みんなであそぼうよⅡ～ともだちといういろなおにあそびをしよう～身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組もうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

道徳編 P45 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 4主として集団や社会とのかかわりに関すること(1)約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切にする。

身近な社会生活における出来事なども取り上げながら、約束やきまりをしっかりと守る態度を育てることが大切である。

体育編 第1学年～第4学年 内容E ゲーム

一定の区域で逃げる、追いかける、陣地を取り合うなどの簡単な規則の鬼遊びしたり、工夫した区域や用具で楽しく鬼遊びをしたりする。

こおりオニしたい

2013年2月14日

5歳児

事例

ナオコがタロウに「こおりオニせん？」と誘い、人を集めてこおりオニをすることにした。二人は、3歳児と円形ドッジボールをしていたコウタ達の所へ行った。「こおりオニせん？」「こおりオニする人この指とまれ。」と誘うが、みんなドッジボールに夢中で、なかなか人が集まらない。今度は、木に釘を打って、何かを作っていたジン達の所に行き、「こおりオニやらん？」と誘うが、やはりみんな振り向きもしなかった。そこで、保育室に入って、中にある友だちに「こおりオニする？」と誘うタロウ。①部屋の中にいたサキが、「逃げるの面倒くさい。」「すぐつかまるし・・・。」と言うと、タロウは、「すぐつかまっても、タッチしたらみんなすぐに逃げれるし。」と答える。サキは、タロウの話聞き、こおりオニをすることにした。



園庭で、「こおりオニする人？」とタロウが大きな声で言うと、10人ほど集まったので、オニを決めることにした。そこへ、タロウ達が集まっているのを見たマサヒト達が「仲間に寄せて。」と言って集まって来た。②3、4歳児合わせて、20人ぐらいになった。タロウとナオコは、3、4歳児に「こおりオニ」のルールを説明していた。

やっとオニが決まった。「1、2、3・・・」。オニが数を数え、みんなが一斉に逃げ出すと、「こおりオニ」が始まった。

記録者考察

①より

「こおりオニ」をするという目的に向かって、ナオコとタロウは、みんなに声をかける。声をかけるが、なかなか受け入れられない。しかし、あきらめずに、声をかけ続けた。「すぐつかまるから。」という友だちの声にも、自分の経験を話すことで、一緒にやってくれることになった。受け入れられたり、受け入れられなかったりする経験をしながらも、目的を達成しようとする姿があった。

②より

5歳児だけでなく、3、4歳児も仲間に入ってきたので、「こおりオニ」のルールを教える5歳児。自分より小さい子どもの存在は、自分の力や成長を確認できる場になる。5歳児は、最年長らしく自信を持って、ルールを説明していた。

保育者考察

昨日のこおりオニの経験から、ナオコには“またみんなでやりたい”という気持ちがあったのだろう。保育者ではなく友だちに声を掛けていた姿から、自分たちで遊びを進めていこうとする気持ちを感じ取れるし、「こおりオニする人この指とまれ～」と大きな声で呼びかけたこともできるだけたくさんの人を集めたいという気持ちが伝わってくる。サキは、普段からあまり体を動かして遊ぶことが好きではなく、遊びへの苦手意識や、自信のなさがうかがえる子どもである。今までもこおりオニの経験はあったが、少し参加してもいつの間にかいなくなっている事が多い。保育者が誘っていても同じように断つだろうと予想するが、このときのタロウの“つかまってもすぐに逃げられる”という返事が、“つかまっても大丈夫なんだ”“私もできるかな”というサキの安心材料になったのではないかと感じる。ナオコやタロウが1度目に何人かの友だちに声を掛けていたことで、2度目の誘いにたくさんの人が集まったのではないかと。3、4歳児にルールを教えてあげている2人の姿から、自分たちで話し合ったり、考えたりして作り出したルールや、これまでの遊んできた経験が自分たちの遊びとしての自信になっているように感じる。また、“自分たちがやりたかったこおりオニがやっとならできる！”というやる気がみなぎっている姿なのではと考察する。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎
・協同性

目的意識を持ち、みんなで遊ぶためには、どうしたらいいのか考え、行動し、友だちと協力していくことで、みんなと一緒に遊ぶ楽しさがさらに実感できる。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情
・相手を思う気持ち

異年齢の交流は、お互いの子ども達にとって成長の機会となる。5歳児は、4歳児に合わせたり、やさしくしたりすることで、相手の立場を考え行動することを学ぶ。また、4歳児にとっても、憧れの対象を持つことにより、「なりたい自分」をイメージすることができる。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全
・自ら運動する意欲

友だちと一緒に体を動かして、楽しく遊ぶ心地良さを経験することによって、自分から身体を動かそうとする意欲が育ってくる。



小学校教育課程






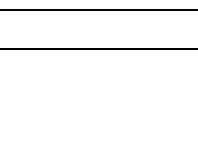
スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし K-2~3 みんなであそぼう なかよくなるろう I~なかよししゅうかいをしよう~ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむことができる。

小学校学習指導要領解説

道徳編 P43 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかわりに関すること(3)友だちと仲よくし、助け合う。

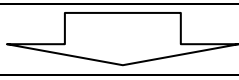
よい友だち関係を築くには、互いを認め合い、学習活動や生活の様々な場面を通して理解し合い、協力し、助け合い、信頼関係や友情をはぐくんでいくことが大切である。

文字		2 物の数や文字に興味を深め、遊びや生活に取り入れる
4月～3月		5歳児
遊びや生活の中で、文字を使う経験を積み重ねていく中で、文字への興味や関心持つ。文字を使って自分の思ったことや感じたことを伝え合う喜びや楽しさを味わうのである。		
9/11 ↓	敬老の日を前に、おじいちゃんとおばあちゃんにお手紙を書いた。分からない文字は、先生に聞いたり、ひらがな表を見たりして書いている。誰かに思いを伝える手段として文字を使うようになるのである。	
10/18 ↓	レストランごっこで、看板がいることに気がつき、保育者や友だちから教えてもらいながら看板を書いている。	
12/11 ↓	死んだバッタを埋めた所に、誰にも、踏まれないように看板を作った。	
1/17 ↓	クラスみんなでカルタ作りをすることになった。自分の好きな文字を選び、文字札と絵札を完成させた。	
1/17 ↓	保育者に、お手紙を書いて、大好きな気持ちを伝える子ども達。	
1/18 ↓	郵便屋さんごっこが始まり、年賀状を書いてポストに入れると、郵便さんが届けてくれる。	

育っているもの	
確かな学力につながる基礎 ○学びの芽生え ・文字を使う力 ・文字の働き、必要性に気付く力 ・文字を習得する力 ・文字を使って伝える力	豊かな心につながる基礎 ○自尊感情 ・自分への自信 ○人間関係 ・友だちとの信頼関係



小学校教育課程 スタートカリキュラム A-4 たのしいなまえかあどをつくろう F-4 がっこうのなかのことばやかずをさがそう K-4 がっこうでおせわになったひとにてがみをかこう



小学校学習指導要領解説 国語編 第1学年及び第2学年 ・P38 内容 B書くこと 伝えたいことを簡単な手紙にかくこと ・[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項] ※P45 長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと ※P47 平仮名及び片仮名を読み、書くこと
--

「ちゃ」と「ん」が書けん

2012年9月11日(火)

5歳児

事例

敬老の日を前に、おじいちゃん、おばあちゃんにお手紙を書くことにしたジュン。まず、おじいちゃんとおばあちゃんの顔の絵を描いた。おじいちゃんの顔の下に、「おじいちゃん」と書きたかったのだが、「おじいち」まで書いて、止まってしまった。①どうしたらいいのかしばらく考えているところに、隣にいた保育者が困っているジュンを見て、「おじいちゃんの『や』はちっちゃい『や』」と教えてあげると、自分が知っている「や」を小さく書いた。



今度は、おじいちゃんの「ん」が書けずに、困っていた。キョロキョロしながら、周りのお友だちのお手紙を見ている。ジュンは、保育者に向かって、「Y先生、『ん』が書けん。」と言うと、保育者は、「ここ(黒板に貼っているひらがな表)に見にきいや。」と言った。ジュンは、黒板のひらがな表を見て、「ん」を見つけると、指でひらがな表の上から「ん」を一度なぞってみた。覚えてから、イスに座り、「ん」を書いた。今度は、「おばあちゃん」と書こうとする。今度は、一人で「おばあちゃん」と書ける。そして、自分の名前「じゅん」と書いて、うれしそうに、保育者に見せに行った。



記録者考察

①より

子ども達は、生活の中でいろいろな文字を使って、読んだり書いたりしていることが分かる。小さな「や」や「ん」が分からなかったジュン。「おじいちゃ」「おじいちゃ」と言いながら、「おじいちゃん」と書くのではなく、拗音の「ちゃ」であることは耳で聞いて知っている。でも、書き方が分からない。大好きなおじいちゃん、おばあちゃんにどうしてもお手紙を書きたかった。だから、一生懸命考えたり、先生に聞いたり、ひらがな表を見たりして、「おじいちゃん」「おばあちゃん」と書いたのだった。

子ども達は、生活の中でいろいろな文字を使って読んだり、書いたりしていることがわかる。「誰かにお手紙を書きたい。」「誰かにこのことを伝えたい。」と思った時に、文字を自分から書こうという気持ちになるのである。

保育者考察

遊びや生活の中で文字や数字にふれて遊んでいる子ども達。年長になって更に文字への関心が高まっている。絵本や遊びのなかで文字にふれ、読めるようになると嬉しくて、今度は自分で書いてみたいくなる。幼稚園では文字や数字への興味関心を引き出したり、読んでみたい、書いてみたいという子ども達の意欲を更に高めたりするために50音表などを活用している。筆順は自分なりに書いたり、鏡文字だったりするが、初めのうちには「文字」というより「絵」のような感覚で覚えていくのではないだろうか。

月刊絵本などに自分で自分の名前を書くときには名札をはずしてそれを見ながら書いたり、自分の名前の文字カードを見ながら書いたりしている。自分の名前以外で書けない文字がある時には、貼ってあるひらがな表を見て書こうとする姿も見られている。

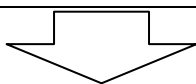
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字を使う力

文字は思いを伝える手段である。伝えたい思いがあって、伝えたい人がいて、そうした中で文字だと伝えやすいことを子ども達は、知っていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第3期みんななかよし K-4 みんなであそぼう なかよくなるうⅡ ～がっこうでおせわになったひとにてがみをかこう～ 学校の中で出会った人や、お世話になった人に自分の気持ちやお礼の言葉を伝え、人とのかかわりを楽しむ。

小学校学習指導要領解説

国語編 P45 第1学年及び第2学年 内容【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】イ 言葉の特徴やきまりに関する事項 表記に関する事項 (エ)長音、拗音、促音、撥音などの表記ができ、助詞の「は」、「へ」及び「を」を文の中で正しく使うこと。

「入門期」においては、児童一人一人の生活の言葉を大切にしなければならない。就学前も伝えたいという思いを大切にすることは同じである。

もう1回書こう！

2012年10月18日（木）

5歳児

事例

レストランごっこの準備をしていたアキヒロ。①レストランの看板を書きたくて、保育者に一文字一文字習いながら、一生懸命「れすとらん」と文字を書く。書き終わった時、友だちのコウジが「上手。」と手をたたいた。保育者が『れすとらん』の看板があったら、次何があったらいいだろうかねえ。」と聞くと、コウジが、裏を指差し「しまりました。」と言う。「それやったら分かる。」とコウジ。

②「コウジくん、もう一回書こう。ここに『しまりました』って書いたらいいで。」と言い、今度は、保育者に代わってコウジと一緒に、ひらがな表を見ながら書き出した。

書き終わったら、「しまりました」と書いた紙を看板に貼ってレストランの看板が出来上がった。

看板をお店の机に置いてから、レストランごっこが始まった。③注文を受けたり、料理を作ったりしながらも、アキヒロは、一生懸命、紙に文字を書いていた。



記録者考察

①より

「れすとらん」の看板を書きたかったアキヒロ。ひらがな表を見ながら一文字ずつ「れすとらん」と丁寧に書いた。友だちのコウジは、アキヒロが丁寧に書いたのを見て、一緒に喜んでいた。

②より

保育者の声かけにより、「しまりました」もいることに気付いたコウジの誘いにより、今度は、少し自信を持って「しまりました」と書いたのだった。立派な看板が出来たので、二人はさらに張り切って、レストランごっこを始めた。

③より

子ども達は遊びのいたるところで文字を使っているのである。子ども達は、必要だと思ったり、文字に興味を持ったりした時、書き方を工夫したり、自分なりの書き順で書いたりする。つまり、生活や遊びの中で自然に文字を獲得し、自分たちで生活に文字を生かしているのである。子どもにとって文字との出会いは「文字を覚えるための出会い」ではなく、「夢中になって遊びや生活を広げていく出会い」なのである。

保育者考察

お客さんに来て欲しかったアキヒロは、一度自分で「れすとらん」と文字を書き、看板を作っていたのだが、思うように書けず、「変になった。」と保育者に伝えた。そのままでも十分素敵な看板だったので、「もっと大きく書きたい。」というアキヒロの要望に付き合い、二人で看板作りを始めた。保育者に教えてもらって書いてみることで、「上手に書けた。」と自信をつけたことと、そばでコウジが褒めて認めてくれたことで、得意気な気持ちになっていた。「れすとらん」の文字だけでも良かったのだが、上手に書けたことでより文字への関心が高まるのではないかと考え、保育者はコウジと一緒に見届けることにした。そして、あると便利な言葉に気付かせるように声をかけた。コウジに任せることで友だちに認めてもらう喜びや、教えながら一緒に書くことで共通の思いを味わって欲しいと思い、保育者はその場を離れ、2人のかかわりを見守った。レストランにお客さん呼びたいという気持ちから作り始めた看板だったが、文字を書くうちに、もっと書きたいという意欲につながり、看板を完成させたのだと思う。文字への興味が出始め自分なりに書いているが、「何かうまく書けない。」「この字が難しい。」という思いや、書けることがうれしいという気持ちを繰り返しながら、さらに文字への関心を高めている。そこには、保育者の存在とともに、励ましてくれたり教えてくれたりする友だちの存在が大きい。「何て読む?」「どうやって書く?」という子どもの要求に丁寧にいかわり、文字環境を工夫しながら、意欲や関心を広げていきたい。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字の働き、必要性に気付く力

子ども達は、文字が表す具体的な物事を様々な体験から知っている。文字が何かを表す記号であり、情報を与え、行動の手掛かりを与えてくれるものであることを理解しているのである。だからこそ、便利な文字を自分でも使ってみようとし、文字を自分のものにしていく。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・自分への自信

自分のできることに自信を持ち、友だちに伝えたり、教えたりすることを楽しんでいる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」 第1期はじめまして A-4 みなさんよろしくねⅢ ～たのしいなまえかあどをつくろう～ 言葉や文字に関心を持ち、自分の名前を進んで書いている。

小学校学習指導要領解説

国語編 P47 第1学年及び第2学年 内容【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】ウ文字に関する事項 (ア)平仮名及び片仮名を読み、書くこと。

平仮名の読み書きは、各教科等の学習の基礎となるものであり、第1学年でその全部の読み書きができるようにする必要がある。

ここにわこないで

2012年12月11日(火)

5歳児

事例

①ナオコは、昨日、死んだバッタを玄関すぐ横の花壇に埋めた。ナオコは埋めた所に花を置き、お墓にしたのであった。しかし、玄関のすぐ横ということもあり、また、今は何も花壇に花が植えられていないので、間違っ誰かがお墓を踏んでしまったようだ。

そこで、②ナオコは、「ばったのおほか ここにわこないで」と紙に書いた看板を作った。その看板の前には、昨日のお花が、今日もたくさん置かれていた。



記録者考察

①より

生き物は子ども達を引きつける大きな力を持っている。小さい虫や生き物は、子ども達にとって、魅力を感じたり、捕まえたり、もっとその虫について知りたいと感じたりするなど、興味関心をかき立て、次への意欲を引き出すこともある。しかし、一方で、生き物は必ず死んでしまうという現実もある。ナオコは、バッタが死んでしまったという事実を受けとめ、ナオコなりに考えてお墓を作ったのだろう。

②より

ナオコは、「ここにお墓があることがみんなに分かれば、踏まれることはない。」と考えたのだろう。紙に「ばったのおほか ここにわこないで」と書いた紙をお墓に置いた。ナオコは、レストランごっこで、大勢の人に何かを知らせたい時には、知らせたいことを紙に書いて貼っておくという経験をしている。だから、ナオコはここにお墓があるということを伝える方法として、紙に書いたのだろう。今ここにいない人に伝える時は、文字がもっとも有効な手段となることを、子ども達は遊びや生活の中で学んでいる。

保育者考察

たまたま発見したバッタだったのか、遊んでいるうちに死んでしまったのかは分からないが、生き物に触れて親しむ中で、生き物の命、命の大切さをナオコなりに感じていたのだろう。死んでしまったから、それで終わりではなく、命の大切さ、虫への親しみの気持ちから墓を作るという行動に出たのではないか。看板を立てることで、他者にも、“ここにお墓がある”のだと気付いてもらえると思ったのだろう。もしくは、自分が作ったお墓であるから、踏まないでという思いもあったのかもしれない。また、花を添えるということも、自分の生活体験とも重ねたのではないか。

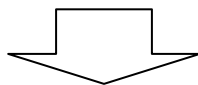
これまでの遊びの中で、文字を習得しつつあるナオコは、普段からも自分の気持ちを文字にして手紙をよく書く。人に何かを伝える時に、文字を使うという経験や、生活や遊びの中で文字を目にする(読もうとする)環境を通して、このような方法を考えついたのではないか。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

- 学びの芽生え
 - ・文字の働き、
 - 必要性に気付く力

子ども達は、文字が表す具体的な物事を様々な体験から知っている。文字が何かを表す記号であり、情報を与え、行動の手掛かりを与えてくれるものであることを理解している。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」 第1期はじめまして A-4 みなさんよろしくねⅢ ～たのしいなまえかあどをつくろう～ 言葉や文字に関心をもち、自分の名前を進んで書いている。

小学校学習指導要領解説

国語編 P47 第1学年及び第2学年 内容【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】ウ文字に関する事項 (ア)平仮名及び片仮名を読み、書くこと。

平仮名の読み書きは、各教科等の学習の基礎となるものであり、第1学年でその全部の読み書きができるようにする必要がある。

カルタ作り

2013年1月17日（木）

5歳児

事例

①ぱんだ組のカルタを作ることになった。自分の好きな文字を一文字選び、その文字で始まることばを考え、文字札を作ったり、文字札に合わせて、絵札を作ったりしながら、パ
ンダ組カルタを完成させていた。



保育者が、完成した札をリカ達と数えると 37 枚あった。まだ、ない「ふ」の札を作っているリカ。「まだ『え』もない。」と保育者が言うと、②「えんぴつかきかきおもしろい」とリカが言う。「なかなか出てくるねえ。」と感心した様子の

保育者に対して、「えをかくのがだいすき」と文を考えるリカ。その後、保育者に文字の書き方を聞いたり、ひらがな表を見たりしながら、「ふ」の文字札「ふねはびゅんびゅんおもしろい」と船の絵を描いた絵札を完成させた。

記録者考察

①より

レストランごっこで、看板を作ったり、メニューを書いたり、スタンプカードを作ったりして、文字は便利な道具であることを経験してきた子ども達。その後、遊びの中で文字を使うことが多くなっていった。文字は、便利な道具だけではなく、楽しい遊びの道具になることに気付いているのである。

②より

リカは、「え」で始まる文をいろいろ考えている。そして、「ふ」の文字札の文も考えた。文字遊びを楽しむことで、さらに、文字に親しみ、文字に関心を持つリカ。だから、リカは、「もっと文字を書きたい」という気持ちになってくるのではないだろうか。

文字を使うことで遊びが広がり、夢中になって遊ぶうちに文字を使いたくなってくる。こうした繰り返しの中で、文字が本当の意味で子どものものになってくるのだろう。

保育者考察

かるたやすごろくの正月遊びを通して文字や数字に興味を持ちだしていた子どもたち。また、普段の遊びの中でも、「あ」から始まる食べ物ゲームなど、子どもたちと言葉遊びを楽しんできたことから、かるたを自分たちで作ってみようと思案する。部屋に貼ってあるあいうえお表を見ながら好きな文字を選ぶことで、言葉が出てきやすいのではないかと考えて、まずは、文字札を作ってみることにした。選んだ文字から自分なりのイメージを膨らませて言葉を重ねる楽しさや、「えんぴつかきかき、たのしいな」「うしはもーもー、ひつじはめーめー」といった心地よい言葉のリズムを楽しんでいる。文字への関心には個人差があるが、思ったことや考えたことを文字で表す楽しさを感じながら、一文字ずつ丁寧に書いている。子どもたちが考えた言葉を模造紙に書いて貼っておいたことで、文字や言葉を目にして、友だちの考えた言葉を読んだり、50音の文字の中で足りない文字に気付いて書き足そうとしたり姿が見られていた。

カルタはまだ作っている途中であるが、自分たちが作った物を遊びに取り入れることで、子どもたちの文字への興味・関心につながるようにと願いかかわっている。また、子どもの書こうとする要求や、個々の発想を受け止めながら、文字の形や書き方を教えたり、言葉の楽しさを感じられたりするように援助しているところである。

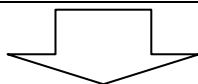
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字を習得する力

文字の便利さに気付いたり、文字を使った遊びを楽しんだりすることで、「文字を覚えたい」「文字を書きたい」と思う気持ちが、心から湧き上がる。その気持ちが、文字を自分のものにする、つまり文字習得につながっていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき F-4 がっこうのこともっとしりたいなⅡ ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中のいろいろな言葉や文字を見つけようとしている。

小学校学習指導要領解説

国語編 P47 第1学年及び第2学年 内容【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】ウ文字に関する事項（ア）平仮名及び片仮名を読み、書くこと。

平仮名の読み書きは、各教科等の学習の基礎となるものであり、第1学年でその全部の読み書きができるようにする必要がある。

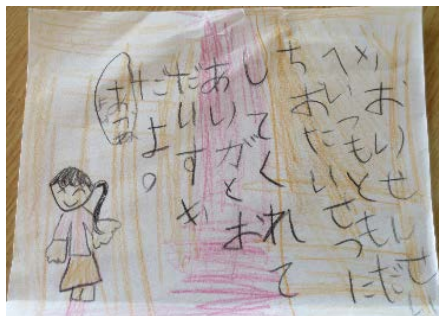
お手紙～さおりせんせいへ～

2013年1月17日（木）

5歳児

事例

①ナオコは、いつもやさしい保育者が大好きである。そこで、今日は、保育者にお手紙を書くことにした。「さおりせんせいへいつもともだちおたいせつにしてくださいありがとうございますだよ。ナオコより」と書き、保育者の絵を描いた。そして、自分で作った手作りの封筒に入れた。封筒を糊で貼ったので、しばらく日なたの場所に置いて乾かしてから、保育者に渡すつもりである。



記録者考察

①より

子ども達は、「自分の好きな人、身近な人に、自分が描いた作品をプレゼントする」という経験をし、次に、「思いを伝えるために書く」という経験をする。これらの経験を通して「手紙とは、思いを託して、伝えたい人に届けるものである」ことを理解していく。ナオコは、自分の思いを伝えたい保育者との信頼関係を基に、保育者に思いを伝える手段として、手紙を選んだのだろう。ナオコにとって文字は、伝えたいことを伝えるためのものであり、手紙を書くことは、思いを伝える手段になっている。

保育者考察

保育者や友だちとの手紙のやりとり（お手紙ごっこ）を通して、「〇〇〇へ」「～より」という手紙の形式を知り、文字や絵を使って気持ちを届けようとしているナオコ。大好きな友だちや保育者に自分の思いや気持ちを伝えたい、手紙を渡すことで気持ちがさらに、つながっていくように感じているのではないだろうか。また、この手紙に書かれている内容は、日頃保育者がクラスの仲間について、友だちを大切にしよう、みんなのことが大好きだよと、伝えていることが、ナオコの心に響いていたのだろうか。

今クラスでは女の子を中心に、好きな友だちや一緒に遊んだ友だちに手紙を渡す姿が増えてきていて、「おてがみかいてきたよ。」「おへんじかくね。」というやりとりを楽しんでいる。まだ字が読めない、書けない子どもも、手紙をもらおうと「これなんてかいちゅう？」「～ってかきたいがやけど、どうやってかく？」と友だちや保育者に聞いたりしながら、一生懸命返事を書こうとし、文字への興味につながっている。また、手紙のやりとりが、“わたしたちなかよしだよね”“だいすきだよ”ということをお互いが感じ合うコミュニケーションの一つになっているようにも感じる。今後、この手紙のやりとりが、郵便ごっこなどの子どもたちの遊びになっていくようにと考えている。

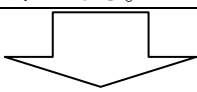
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字を使って伝える力

文字は思いを伝える手段である。伝えたい思いがあって、伝えたい人がいて、そうした中で文字だと伝えやすいことを知るのである。伝えたいくなる体験、伝えたい人との信頼関係を基に、文字を使いたくなる環境を設定することが大事である。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第3期みんななかよし K-4 みんなであそぼう なかよくなるろうⅡ ～がっこうでお世話になったひとにてがみをかこう～ 学校の中で出会った人や、お世話になった人に自分の気持ちやお礼の言葉を伝え、人とかかわりを楽しむ。

小学校学習指導要領解説

国語編 P38 第1学年及び第2学年 内容 B書くこと②言語活動例 オ伝えたいことを簡単な手紙にかくこと

相手を明確にして伝えたり、返事をもらったりという交流をし、交流する楽しさを感じ取らせるようにすることが大切である。

年賀状を書く

2013年1月18日（金）

5歳児

事例

郵便屋さんごっこが始まり、年賀状を書いてポストに入れたり、郵便屋さんから年賀状を受け取ったりと楽しく遊んでいる5歳児。

①ナツコは、今朝、郵便屋さんから、ミエからの年賀状を受け取った。喜ぶナツコ。

ナツコは、今度は、ミエに年賀状を書こうと、年賀状を書くコーナーに行き、ミエへの年賀状を書くことにした。

年賀状の表の左下に自分の名前を書いた。真ん中には、大きくミエの名前を書いた。そして、年賀状をひっくり返して、かわいい女の子の絵を描いた。その絵を色鉛筆で丁寧に塗って、年賀状は完成した。そして、年賀状を持って、ポストの所に行き、投函した。きっと、郵便さんが、ミエに年賀状を届けてくれるだろう。



記録者考察

①より

ナツコとミエは、一緒のクラスでいつも顔を合わせている関係である。そのミエから、「年賀状をもらう」ということは、ナツコにとって、一緒に遊ぶこと以上に、嬉しいことであったのだろう。

この年賀状のやり取りは、文字を書いたり、思いを伝えたりするなど、子どもの文字への興味関心を育む活動であるとともに、人間関係が広がったり深まったりする活動でもある。

保育者考察

郵便屋さんごっこは年中の時にも経験している遊びであり、正月には、幼稚園から自分への年賀状が家に届き、自分への郵便物を受け取る嬉しさを味わった子ども達である。友だち同士で年賀状のやり取りをした子どももいて、その経験が遊びにいかされている。

年賀状にへびの絵を描いたり、写真年賀状を真似て、ハガキに自分の顔を描いたりしている子など、様々な工夫して年賀状を作っている。

表書きは、送る相手の名前を大きく書いて、自分の名前は左に小さく書くことや、丁寧に書くことの大切さなど、それまで知らなかった子ども達も、友だちや保育者の書く様子を見て真似て書いている。

丁寧に仕上げたポストに投函するナツコの姿から、ミエから年賀状をもらって嬉しい気持ち、「喜んでくれるかな」と、ミエの気持ちを想像しながらワクワクしている様子がうかがえる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字を使って伝える力

伝えたい体験と伝えたい人との信頼関係の中で、文字を使おうとする気持ちが生まれてくる。

豊かな心につながる基礎

○人間関係

- ・友だちとの信頼関係

文字を使い、思いを伝え合う活動を通して、「伝いたい」という気持ちを育てることで、さらに友だち関係が広がり深まっていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第3期みんななかよし K-4 みんなであそぼう なかよくなるろうⅡ ～がっこうでお世話になったひとにてがみをかこう～ 学校の中で出合った人や、お世話になった人に自分の気持ちやお礼の言葉を伝え、人のかかわりを楽しむ。

小学校学習指導要領解説

国語編 P38 第1学年及び第2学年 内容 B書くこと②言語活動例 オ伝えたいことを簡単な手紙にかくこと

相手を明確にして伝えたり、返事をもらったりという交流をし、交流する楽しさを感じ取らせるようにすることが大切である。







数・時計

2 物の数や文字に興味を深め、遊びや生活に取り入れる

4月～3月

5歳児

遊びや生活の中で、ものの数を数える経験や、時計の時刻を目安に行動する体験を積み重ねる中で、数量や時間に関する興味や関心、感覚を養っていくのである。かくれんぼ、縄跳びなどで、数を数えたり、おじゃみの数を数える、ドッジボールのチームの人数を数えるなど、ものなどの個数を数える経験を重ねていく中で、個数と数字が対応していることに気付いたりするのである。このように、数への関心、感覚を遊びの中で育んでいる。

<p>7/4 ↓</p>	<p>子ども達は、朝登園したら、一日のスケジュールを見て、見通しを持った生活をしている。そうすることで、やろうとすることを自分の力で切り替えて、今やるべきことに集中できる自己抑制も出来てくる。また、そのような経験の中で、時間の感覚も身に付けている。</p>	
<p>9/12 ↓</p>	<p>カード遊びである「神経衰弱」の要領と同じ、絵合わせカードで遊ぶ子ども達。2枚を1組として、カードを数えたり、友だちとどちらが多いかを競ったりしている。</p>	
<p>9/12 ↓</p>	<p>絵合わせカードの遊びでは、最後に誰が一番カードを取っているかで勝敗を決める。数を数えるという勝敗の決め方以外にも、カードを積み上げた高さで、勝敗を決めることもある。</p>	
<p>11/19 ↓</p>	<p>アクセサリ作りの遊びでは、子ども達は、いろいろ工夫をして、ビーズや数珠玉、フェルトなどの材料を使いながら、好きなアクセサリを作っている。キラキラ光る大きめのビーズは、「ひとり5こまで」と決まっている。数を数えながら、「○個使ったらあと○個。」と数の合成や分解が自然と出来ている。</p>	
<p>12/5 ↓</p>	<p>大縄で「郵便屋さん」を楽しむ子ども達。歌に合わせて、数を数えたり、友だちと跳んだ数を競ったりしている。</p>	
<p>1/22 ↓</p>	<p>お正月遊びをする中で、カルタ取りをしていた子ども達。全部取り終わったら、みんなでカルタを数えて、勝敗を決めるのである。</p>	

育っているもの

確かな学力につながる基礎

- 学びを支える基礎
- ・自己抑制

○学びの芽生え

- ・時間の感覚
- ・個数を数える力
- ・個数を比べる力
- ・文字への関心
- ・個数を合わせる力
- ・数についての感覚
- ・動作を数える力

体力・健康につながる基礎

- 健康・安全
- ・用具を操作する力

小学校教育課程



スタートカリキュラム

- E-1～3 きょうしつがつきゅう はじめまして
- F-4 がっこうのこと もっとしりたいな
- G-2 きょうしつ がつきゅうだいすき
- H-1 みんなであそぼうよ
- J-2 どうぶつらんどへようこそ



小学校学習指導要領解説

算数編	
・ P54 第1学年 内容A数と計算	(1) 数の意味と表し方
・ P56 第1学年 内容A数と計算	一つの数をほかの数の和や差としてみること
・ P57 第1学年 内容A数と計算	具体物をまとめて数えたり等分したり、それを整理して表す活動
・ P58 第1学年 内容A数と計算	加法、減法
・ P63 第1学年 内容B量と測定	・時刻の読み方
	・身の回りにあるものの長さ、面積、体積を直接比べたり、他のものを用いて比べたりする活動
・ P79 第2学年 内容B量と測定	時間の単位
体育編	
・ P24 第1学年及び第2学年 内容	A体づくり運動 用具を操作する運動遊び
国語編	
・ P47 第1学年及び第2学年 内容	[伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項]平仮名及び片仮名を読み書くこと。

あと1分や

2012年7月4日(水)

5歳児

事例

石鹸を泡立てて遊ぶグループでの会話。

もう少しで、プール遊びをすることを先生から聞いたらしく、

①「4になったら(10時20分)、後片付けやって。」

とサキコ。時計を見ると、10時20分少し前になっていた。その時計を見たリンが、「もうなっちゅうやん。」と言う。

時計を見たサキコが、まだ長い針が4のところに来ていないことに気がつき、「あと1分や。あと1分。」と言った。

②そうしている間に、10時20分になり、自分達で後片づけを始めた。



記録者考察

①より

子ども達は、朝登園したら、1日のスケジュールを見て、見通しを持った生活をしている。何時まで(もしくは、長い針が〇のところにくるまで)は、遊ぶことができ、その時間がきたら、後片づけを始めなければならないことを、理解している。日ごろから時刻を意識し、見通しを持った生活をするにより、時刻に関心を持っているのである。

また、その時間までに、あと何分であるという、だいたいの時間の感覚も身に付いていることが分かる。子ども達は、時計の学習をしている意識はないが、日ごろから、「あと何分で、片づけをしなければいけない。」「あと何分は、遊べる。」など、時刻を身近に感じ、だいたいの時間の感覚が分かり、生活の中に取り入れているのである。

②より

日頃から、一日の生活に見通しを持って行動しているので、約束の時間になったら、楽しい遊びだったとしても、一度遊びに区切りをつけ、気持ちを切り替え、次への活動に向かうことができるのである。

保育者考察

数字を読む子どもが半数以上になっている。次の活動への切り替えや見通しを持って片づけができるように、時計を見ながら約束の時間を決めたりすることもある。「あと1分」の『1分』は正確ではなかったかもしれないが、視覚的に「針がまだ4にきてない」=「まだ時間がある」(少し、いっぱい)という認識だと思われる。サキコとリンのように、同じ時計を見ても、各々の見方は違う、けれども遊びの切り替えをすることや、折り合いをつけることができる目安になっている。

日々の保育の中では、ボードに1日のスケジュールを書いて見通しが持てるようにしたり、タイムタイマーを使って視覚的に時間の経過を感じられるように工夫したりしている。

育てているもの

確かな学力につながる基礎

〇学びを支える基礎

- ・自己抑制

やろうとすることを自分の力で切り替えて、続きはまた次の機会にし、今やるべきことに集中することができるという自己抑制は、小学校の学習活動を可能にしていく。もちろん自己抑制の前には、やりたい遊びを充分に行う自己発揮がある。

〇学びの芽生え

- ・時間の感覚

子どもが自ら生活を進めるための手がかりとして、時計は大切な道具であり、時計の時刻を目安に行動することで、みんなが気持ちよく過ごすことができる。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第1期ははじめまして E-1~3 きょうしつがっきゅうはじめまして I II III 学校のきまりやマナーを守ることを通して、学校は時程合わせて行動することを学ぶ。

小学校学習指導要領解説

算数編

・P63 第1学年 内容 B量と測定 (2)時刻の読み方 日常生活の中で時刻を読むことができるようにする。

・P79 第2学年 内容 B量と測定 (3)時間の単位 時間について理解し、それを用いることができるようにする。

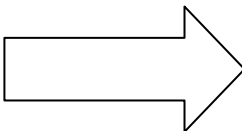
日常生活の中で、時刻を読むことは、比較的早くから必要になる。日常生活での活動などと時刻とを関連させることにより、日ごろから時刻に関心をもてるようにすることが大切である。

20と4で24!

2012年9月12日(水)

5歳児

事例



絵合わせカードで遊んでいたマサキとアキコ。神経衰弱の要領で絵の組み合わせを見つけていく。穴の開いたカードを上にして、2枚を重ねると穴の中から下のカードの絵が見える仕組みである。
 ①マサキは、この遊びが大好きで、しかも、得意である。次々に2枚の組み合わせのカードをめくっていく。どんどんカードを取っていくマサキの記憶力にアキコも驚くばかり。最後まで取ってしまうと、二人はカードの数を数えだした。2枚を一組として、「1、2、3、4。」と数えた。マサキも、2枚を一組として、「1、2、3……20」と数えた。②20個積み上げたマサキのカードの上に、アキコは自分のカードを乗せて、「24個入っちゃう。」という。アキコが「20と4で24。」と二人の数を合わせて、ゲームは終了した。

記録者考察

①より

同じカードをめくっていく神経衰弱の遊びより難しい絵合わせカードの遊びであるが、子ども達は、絵を覚えているのか、どんどんめくって取っていく。勝敗は一目瞭然なのだが、たくさんカードを取ったマサキは、2枚で一組であるということが分かっている、2枚ずつ数えていった。負けたアキコもマサキが数えるのを見守っていた。

②より

数え終わった後、マサキがカードを置く待ち構えたように、自分のカードの数を足して「24。」という数字を言ったのである。ものの個数を数えようとする時、数える対象に数詞を順番に正しく1対1対応させて唱え、対応が完成した時の最後の数によってもものの個数を表す。この遊びの場合、2枚1組なので、「2ずつ」とまとめて数えて組の個数を表しているのである。この活動が、2ずつ、5ずつ、10ずつなど幾つかずつまとめて数える活動になり、そして、ものを等分する時に、全体を同じ数ずついくつかに分ける活動へとつながっていくのである。

保育者考察

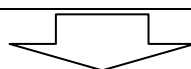
マサキは、この遊びを1学期からずっと楽しむ姿が見られている。最初は、順番やルールが守れないこともあったが、だんだんと友だちと一緒にこのゲームの楽しさを感じられるようになってきたように思う。カードの絵が2枚合わさらないと取れないので、2枚で1組ということを自然に感じているのではないだろうか。アキコも、マサキが、この遊びが得意ということを知っているし、マサキにとっては自信になっている。友だちの良さを認め合う良い関係が育ってきたように思う。

育っているもの

確かな学力につながる基礎○ 学びの芽生え

- ・ 個数を数える力
- ・ 個数を合わせる力

実際に物を数えたり、比べたりする経験を中々、数を組み合わせることができるようになってくる。数を組み合わせることで、足し算へと移行していくことができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

- スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき
- ・ F-4 がっこうのこと もっとしりたいなⅡ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～
 - ・ G-2 きょうしつ がっきゅうだいすきⅡ～きょうしつのなかのことばやかずをさがそう～
 - ・ J-2 どうぶつらんどへようこそⅡ～どうぶつらんどでもっとなかよくなる～
- 学校の中にあるものの数や数字に関心をもったり、仲良し作りをしながら数に親しんだりする。

小学校学習指導要領解説

算数編 第1学年 内容 A数と計算

・P57【算数的活動】(1)具体物をまとめて数えたり等分したりし、それを整理して表す活動

具体物をまとめて数えることについては、2ずつ、5ずつ、10ずつなど、幾つかずつにまとめて数える活動などを指導することが大事である。特に10ずつのまとまりを使って数える活動は、十進位取り記数法の理解のための素地的な学習となる。

・P58A(2)加法、減法 ウ簡単な場合について、2位数などの加法及び減法の計算の仕方を考えること

繰り上がりや繰り下がりのない2位数と1位数との加法、減法について、計算の理解を確実にしていくだけでなく、2位数までの数の理解もより確実にしていかなければならない。

誰のが一番高いかな？

2012年9月12日（水）

5歳児

事例

絵合わせカード遊びに、たくさん人が集まってきた。セイヤ、シンヤ、マサキ、ケンタ、ジュン、アキコ、保育者。ジャンケンをして、カードを取る順番を決める。取る順番が決まったら、1人ずつカードをめくって、組み合わせのカードを見つける。「あっ見つけた。」「ここにあったはず。」「ぜったいこれや。」そんな会話をしながら、次々カードをめくって、絵を合わせていく。

最後のカードをめくったら終わり。自分が取ったカードを積み上げ、真ん中に集めて、みんなで高さの比べっこが始まった。一番多いのは、アキコであった。



左から順番に
保育者、ケンタ、マサキ、アキコ

記録者考察

①より

今回は数を数えて勝敗を決めるのではなく、積み上げたカードの高さで誰が一番かを決めた。数というのは、数えていく操作と大小比較という二つの発達がある。この二つは平行して発達しているのである。この場合は、「高さ」でもって、大小比較をし、誰が一番多く取ったのかで、勝敗を決めたのである。数の大小を、積み上げた高さでリンクさせていることが分かる。

数える操作と大小比較の両方の発達がベースにあった上で数量が発達していき、そして、表記が出てくるのである。そして、これが、小学校の計算の基礎となっていく。幼児期には、ものを数える機会を多くする、いろいろな方法で、大小、多い少ないの比較の機会を増やしていくことが大事である。

保育者考察

自分がたくさんとりたい、勝ちたいという思いが強く出る時期もあったが、勝ったり負けたりを繰り返して体験していくうちに、友だちと一緒にカード遊びの楽しさを感じられるようになってきたように思われる。遊びの中で思ったことや気付いたことを自分の言葉で表すことで遊びがより楽しくなることもわかってきたようだ。たくさんカードをとった人が勝ちということは共通理解できていて、数の大小を比べる方法は、これまでの遊びの中で色々な方法があることを経験しているので、今回は、高さで比べたのではないだろうか。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・個数を比べる力

個数を比べる時、数えるだけでなく、カード（1枚）の厚さがすべて同じという条件であれば、カードを積み重ねることによっても、だれが多いか少ないか、比べることができるということを理解している。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき F-4 がっこうのこともっとしりたいなⅡ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中にあるものの数や数字に関心を持ち、学校の中のいろいろなものの数を数えたり、数字を探そうとしたりする。

小学校指導要領解説

算数編 P63 第1学年 内容 B量と測定【算数的活動】身の回りにあるものの長さ、面積、体積を直接比べたり、他のものを用いて比べたりする活動

様々な場面で、比較や測定を行うことを通して、長さが長いとは、面積が広いとは、体積が大きいとはといったそれぞれの量の意味やその測定の仕方について理解をより確かなものにし、量の大きさについての感覚を豊かにしているのである。

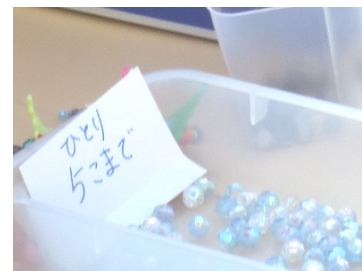
4個だからあと1つだけ

2012年11月19日（金）

5歳児

事例

ユウコとレイナとカナは、フェルトや数珠玉、ビーズをテグスに通し、アクセサリー作りをしていた。そこへマサキやアイコ、サキコがやってきて、一緒に作るようになった。どの材料を使ってもいいが、キラキラ光る大きめのビーズは、「一人5こまで」と決まっていた。



①ユウコは、「マサキ君、これ一人5こまでで。」

と教える。大きめのビーズの入れ物には、「ひとり5こまで」と書いている。マサキがネックレスを作っていると、ユウコが「マサキ君、これ二つ使った？」と聞いた。「うん。」と答えるマサキ。「あとは3つ使えるよ。」とユウコ。マサキが3つめを使うとユウコは、「あと二つだよ。」と教える。少しして、ユウコがマサキのビーズを「1、2、3、4」と数える。「4個だからあと一つだけ。」と教える。マサキが5個目を使うと、「マサキ君、これでもうおしまいよ。」とユウコが言った。



記録者考察

①より

キラキラ光るビーズは「ひとり5こまで」と決まっているので、子ども達は、そのきまりを守りながら、自分で好きな材料を選び、アクセサリーを作っていた。

ユウコは、後からきたマサキに、いくつ使ったか聞いた後、「あと〇個で。」と教えている。ユウコは、5個のビーズを、〇個使ったらあと何個使えるかという経験を通して、「5」の数字を、「1と4」「2と3」「3と2」「4と1」と分解して構成的にみることができているのである。体験なくしては数の感覚は育たないのである。

保育者考察

ビーズの数を「ひとり5こまで」と表示したのは、誰もがたくさん使いたい綺麗で魅力的なビーズを分け合っ一緒に使えるようにということと、ほとんどの子どもが数を数えられるようになり物と数との対応を理解していることから、遊びの中で数に触れて欲しいという思いからであった。

こだわって作る子ども達は「この次にフェルト入れて、ビーズを入れる」と、配色やバランスを考えながら、5個という限られた数のビーズをどこに通すのかも考えて作っている。

日頃の仲間関係から、ユウコは、自分が先に遊び始めていて「ひとり5こ」という約束を知っていたので、後から遊びに参加したマサキに丁寧に知らせてあげたのだろう。ユウコの優しさであり相手が誰であってもそうしてだろう。

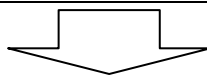
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・ 数についての感覚

子ども達の遊びや生活の中には、数がたくさんあり、数を数えたり、比べたり、分けたりする等の多くの経験を通して、数についての感覚を豊かにすることができる。また、さらに、数についての多面的な見方（数の合成や分解）ができるようになってくる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし J-2 どうぶつらんどへようこそⅡ ～どうぶつらんどでもっとなかよくなるよう～ 仲良しづくりをしながら数に親しんだり、数を構成する二つの数の組み合わせを見つけようとしたりすることができる。

小学校学習指導要領解説

算数編 P56 第1学年 内容 A数と計算(1)エ一つの数をほかの数の和や差としてみること

整数については、ものの個数を数えるという操作から理解が始めるが、次第に一つの数を合成や分解により構成的にみるできるよう、活動を通して学んでいくようにする。合成や分解を理解するという事は、数の意味の確立に欠かせないものである。

いっぱい跳んだ

2012年12月5日(水)

5歳児

事例

保育者は、ナツコやコハル達を誘って、大縄を始めた。ユウコ達もやってきて、「郵便屋さん」等を楽しんでいた。①「ゆうびんやさん ♪ごくろうさん♪はがきが10まいおちました。ひろってあげましょ♪いちまい、にーまい・・・・・・じゅうまい、ありがとうございます」とみんなで歌いながら、跳んでいた。また、ユウコやアイコは、引っかからずに何回跳べるかに挑戦し、50回前後跳んでいた。数える時は、保育者と一緒にみんなで数えていた。

その後、一人ずつ増えていく跳び方にも挑戦していた。



記録者考察

①より

動かないものを数える時は、ゆっくり自分のペースで数えられるが、縄跳びでは縄の動くペースで数えなければならない。数える動作に合わせて数えないといけなないので、ゆっくりではなく、跳ぶリズムに合わせる必要がある。動かないものを数えるより難しい。「郵便屋さん」の場合、歌に合わせて数えるので、歌うことがそのまま数えることになっている。何回跳ぶかに挑戦する時は、跳ぶリズムに合わせて、50前後の数を数えることができていた。

保育者考察

長縄や個人縄はこの時期に毎年繰り返される遊びである。子ども達は年長を見て憧れ、色々な歌に合わせて跳べるようになってきたり、連続で跳べる回数が増えたりすることが嬉しくチャレンジしてきている。たくさん跳べた友だちがいると、「自分も！」とその回数に追いつけ追い越せと挑戦したり、友だちが跳ぶのを応援したり、時には友だちが跳ぶ回数を数えながら「おいしい！あと1回で50だったのに」などと、一緒にくやしがりたりもするだろう。友だちと一緒にチャレンジすることで、自分の目当てを達成できた時のうれしさも倍になり、遊びの楽しさにつながっていくのだと思われる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・動作を数える力

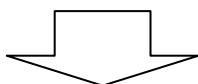
縄跳びで1回跳ぶことは独立した動作であるが、その動作が連続していると数えるのは難しい。数えるためには、リズムと、数詞の序列がしっかりと理解できていないとできない。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・用具を操作する力

友だちと一緒に用具を持ったり、回したり、くぐったり、跳んだりする動きを身に付けながら、楽しく遊ぶことができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第2期がっこうだいすき

- ・F-4 がっこうのこともっとしりたいなⅡ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中にあるものの数や数字に関心を持ち、学校の中のいろいろなものの数を数えたり、数字を探そうとする。
- ・H-1 みんなであそぼうよⅠ～うたやげえむでからだをうごかしてあそぼう～ 歌やゲームで遊ぶことを通じて、いろいろな友だちともっと仲良くなったりすることができる。

小学校学習指導要領解説

算数編 P54 第1学年 内容 A数と計算(1)イ個数や順番を正しく数えたり表したりすること ウ数の大小や順番を考えることによって、数の系列を作ったり、数直線の上を表したりすること。

ものの個数を比べようとするときは、まず、ものの個数を数える。数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に「いち、に、さん・・・」という数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱え、対応が完成したときの最後の数によってものの個数を表し、個数の大小によって判断する。

体育編 P24 第1学年及び第2学年 内容 A体づくり運動 イ多様な動きをつくる運動遊び (ウ)用具を操作する運動遊び

用具をくぐるなどの動きで構成される運動遊び 長なわで大波・小波をしたり、回っているなわをくぐり抜けたりすること。

カルタ取りをしよう

2013年1月22日(火)

5歳児

事例

ジュンは一人でカルタの絵札を並べていた。ジュンは、「誰かこないかなあ。」と友だちを待っていた。友だちが来たら、一緒にカルタ取りをするつもりのように見えた。レイナとユウコとカナがやってきて、「寄せて。」と言いながら、座った。4人で、カルタ取りをすることになった。



①カナが文字札を読む。ジュンとレイナとユウコは、カナが読んだ絵札を見つけるが、すぐには取らない。カナが読み終わるまでは、取らないルールである。しかし、誰よりも早く取りたいので、絵札に触るかどうかがギリギリの所まで、手を近づけていた。一枚の絵札に3人の手が重なると、誰が一番に取っているのかカナが判断していた。

②最後の絵札を取り終わると、「1、2、3、4、・・・13、14。」と3人は一緒に数えた。ジュンとユウコは13枚。レイナは、14枚。「レイナちゃんの勝ち。」とカナが言った。

記録者考察

①より

カナは、文字(ひらがな)は読めるが、まだまだ文を読むのは難しいのか、たどたどしく文字札を読んでいた。ジュンとレイナとユウコは、絵札を取るために、カナが読むのを一所懸命聞いて、絵札に書かれている文字を探している。カナは、友だちが絵札を取れるように、しっかりと読まなければいけないし、ジュン達もカナが何の文字を言うのか、真剣に聞かなければならない。夢中になって遊ぶ中で、文字を習得している姿があった。

②より

3人は、一緒に数を数えた。ジュンとユウコは、「13」と言い同時に終わった。続けて、レイナは「14」と一人で数を言うことになった。だから4人には、すぐにレイナの勝ちが分かったのである。

保育者考察

年明けからカルタ取りをして遊んでいる。冬休み中に家庭で遊んだ経験のある子どももいれば、そうでない子どももいた。誘い合って人数が集まってから始めることもあるが、この日のように、誰かが準備し始めるとそれに気がついてやりたい子どもが集まって、段々と人数が増えていくこともある。

文字に興味をもち、読むことはクラスのほとんどがある程度スムーズにできるようになってきたこの頃、読み手役も人気で、誰が読むかをジャンケンで決めたりしている。

カナはやっと文字が読めるようになったところで、まだすらすらと読める方ではないが、周りの子ども達はそのカナの読むスピードに付き合い、最後まで読み終わるのをきちんと待っている様子がうかがえる。このように、友だちが待ってくれることで、カナは読み手役に満足するし自信にもつながっているのではないだろうか。子ども達の、友だちに対するあたたかい気持ちを感じ取れる。

育っているもの

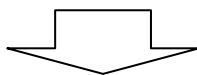
確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・文字への関心
- ・個数を数える力
- ・個数を比べる力

カルタ遊びの中で、文字(ひらがな)を読んだり、聞いた文字をたくさんの中から選んだりすることを繰り返しながら、ますます文字への興味を高めていく。

ものの個数を数えようとするとき、数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱えていくことで、個数を表すことができる。また、表した個数を比べ、数の大小を理解することができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき F-4 がっこうのこともっとしりたいなⅡ ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中のいろいろな言葉や文字を見つけようとしている。

小学校学習指導要領解説

国語編 P47 第1学年及び第2学年 内容【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】ウ文字に関する事項 (ア)平仮名及び片仮名を読み、書くこと。

平仮名の読み書きは、各教科等の学習の基礎となるものであり、第1学年でその全部の読み書きができるようにする必要がある。

算数編 P54 第1学年 内容 A数と計算 A(1)数の意味と数の表し方 (1)ものの個数を数えることなどの活動を通して、数の意味について理解し、数を用いることができるようにする。

ものの個数を数えようとするとき、数えるものの集まりを明確にとらえ、数える対象に「いち、に、さん、・・・」という数詞を順番に1対1に正しく対応させて唱え、対応が完成した時の最後の数によってもものの個数を表すのである。

転がる 滑る 試す 遊び

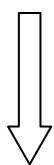
3 自然に触れ、自然物を通して気づいたこと感じたことなどイメージを膨らませた遊びをしようとする

6月中旬～7月頃

5歳児

6月中旬から土山で泥遊びをしていた子ども達

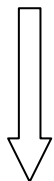
6/29



土団子を作り、団子を転がす遊びを始めた。団子が転がる途中に、形が変わることに気づき、「バナナみたいな形になった。」「ハンバーグみたいな形になった。」と形について話し始めた。そして、形を「三角」「四角」「丸」と表現した。



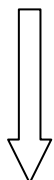
7/4



子ども達は、団子を転がす速さに注目し、小さい団子を作ったり、坂に水を捲き、早く転がしたりする遊びを始めた。また、桶を使って、桶の中に、団子を転がす遊びをしていた。



7/5



保育室で、蓋を転がし、蓋がどこに転がったかで点数を決めたり、積木でトンネルを作り、作ったトンネルの中に蓋が入るかどうかを楽しんでた。



7/13

子ども達は土団子を転がす遊びから、自分たちが滑る遊びへと変わっていった。自分たちが滑る時に滑りやすいように、水を捲きながら滑っていた。そして、滑るだけでなく、坂を上手に上ったり下りたりする遊びをしていた。



育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

・探究心 ・分析力 ・試す力

○学びの芽生え

・形の感覚 ・速さの比較 ・摩擦力の感覚
・数についての感覚

小学校教育課程

スタートカリキュラム

- D-3 じぶんたちががっこうたんけん
- F-1 やってみたいことにちょうせんしよう
- F-4 がっこうのなかのことがばやかずをさがそう
- G-1 きょうしつをすてきにしよう
- J-4 すてきなどうぶつをつくっちゃおう

小学校学習指導要領解説

- ・算数編 P54 第1学年 内容A数と計算
- ・算数編 P64 第1学年 内容C図形(1) 図形についての理解の基礎
- ・理科編 P22 第3学年 内容A物質とエネルギー(1) 物と重さ
- ・生活編 P16 目標(3) 身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気づき意欲と自信をもって生活することができるようにする
- ・総合的な学習の時間編 P13 目標の趣旨(1) 横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと
- ・総合的な学習の時間編 P16 目標の趣旨(4) 問題解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること

泥っていろんな形になるで

2012年6月29日(金)

5歳児

事例

楠木の下の土山で遊び始めた子ども達。土山の上から、筒を使って水を下に流している。下に水たまりができています。

セイヤが、泥の土を集めて、団子を作った。水の含まれ具合で、固さが違うことに気がつき、「僕の団子は、指の後がつくけど、マサヒコのはべちゃべちゃや。」と言った。その団子作りに保育者が加わり、その団子を転がしたことから、遊びが広がった。坂を転がすと団子の形が変わることに気がつき、次々、転がし始めた。

保育者が「おむすびころりん。すつとんとん。」と言うと、「わたしもやろう。」「おむすびころりん。おむすびころりん。」とだんごを転がすが、転がらない。坂の途中で、止まっただんごを押すと、転がる。

①「バナナみたいな形になった。」「バナナになった。」「違う。たまごやきやん。」「こんな形になった。」「ほんまや。ハンバーグみたいになった。」と口々に形について子ども達は話した。

②形が変わった団子を見て、「おもしろい。」と保育者が言う。「これ三角になるがやろう。」「丸を転がしたら四角になった。」「さっき三角になった。一回やったら。」と子ども達。保育者が丸い団子を転がす。「三角になった?」と保育者が聞くと、「三角じゃない。」「ぼく三角になった。」と次々答える。顔の形にしたおむすびを転がすセイヤ。転がした後、「もうすこしで四角になるで。」と言う。

「泥っていろんな形になるで。」「今度は、何になるかな。」と子ども達は話しながら、また、団子を作って転がし始める。



記録者考察

①より

子ども達は、形が変わった団子を、自分たちの身近にある食べ物に見立てていた。今までに、砂や泥で様々なごちそうを作り遊んできたので、食べ物に見立てやすかったと思われる。「バナナみたいな形」という最初の言葉から、子ども達は次々と、その形の特徴に近い食べ物を連想し、泥団子の形が変わっていく様子を食べ物で表現したのではないかと。

②より

子ども達は、「三角」と形の名称が出てからは、食べ物ではなく、「丸」「四角」という名称を使っていた。形の変化を感覚でとらえることができているので、形が変わったらその形に近い形の名称で表現したのではないかと思われる。保育者も、形の名称を使ったことで、形の名称を意識していなかった子ども達も、形の特徴と名称が繋がっていたのではないだろうか。

保育者考察

この頃、室内でペットボトルのキャップを二つ合わせたものを転がす遊びをしていた。この場面とつながり子どもたちの気付きから転がす遊びが広がればと思い、保育者は泥団子を転がした。保育者の予想とは少し違い、子ども達の興味は転がることよりも形が変わることの方に引き寄せられ、このような展開が見られた。形が変わる泥団子を見ながら口々に形を言っている子ども達、その次々に変わっていく団子を目で追うことがおもしろくてたまらない様子である。

子ども達は、水や泥に触れその感触を楽しみながら遊んでいる。ひんやりとする泥の触感や、色々に形が変わることを楽しみながら、その特性や不思議さに気付き始めていると思われる。保育者は、子ども達の遊びを後追いするのではなく、次の発展につながるようなきっかけづくりをしていくことが大切であると考え、それが子ども達のひらめきやアイデアによって、色々な遊びに展開されていくところがとても魅力的である。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え
・形の感覚

先週から土山での水遊びが始まったが、今日、はじめて泥団子作りの遊びが始まった。この時期の子ども達は、図形を認識していないが、「三角」「四角」「丸」など遊びの中で使い、形を理解している。小学校では、筒や箱を見せて、これが、「四角形です。」という授業をしがちであるが、子ども達は、このような経験を通して、自然に図形についての感覚を身に付け、形の特徴を感覚的に捉え、物の形を認めている。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」
・第2期がっこうだいすき G-1 きょうしつがっきゅうだいすき I～きょうしつをすてきにしよう～ 教室など身近な環境を飾る作品を、いろいろな形を使って作ることを楽しんでいる。
・第3期みんななかよし J-4 どうぶつらんどへようこそIV～すてきなどうぶつつくっちゃおう～ お気に入りの動物を粘土で表すことを楽しんだり、粘土で表したことを友だちや先生、家族に伝えたりすることができる。

小学校学習指導要領解説

算数編 P64 第1学年 内容 C図形 図形についての理解の基礎(1)身の回りにあるものの形についての観察や構成などの活動を通して、図形についての理解の基礎となる経験を豊かにする。ア ものの形を認めたり、形の特徴をとらえたりすること。イ 前後、左右、上下など方向や位置に関する言葉を正しく用いて、ものの位置を言い表すこと。

図形にかかわる様々な経験を、遊びや普段の生活の中で経験してきている。これらの経験を生かしながら、身の回りにあるものの形を観察や構成の対象とし、身の回りからそれらを見付けたり、実際に手に取ったり、形作りをしたりすることにより、形の特徴を捉えることができるのである。

ぬらしたら速くなるで！

2012年7月4日（水）

5歳児

事例

1週間ぶりに土山で遊ぶ子ども達。先週の金曜日に団子作りが始まったが、今日も団子を作って遊ぶ。保育者が、とても大きい団子を作って転がす。周りでも、次々作った団子を転がしていく。①シンヤの団子が速く転がっていくのを見て、保育者は、「速い、シンヤ君の速い。」と気がつく。隣の子も「速い。」と言う。「ちっちゃいき、軽いき。」と答えるセイヤ。「えっ軽いき？」と保育者。その保育者の言葉を聞いて、子ども達は「速さ」に注目しはじめた。速く転がる団子を見て、「さっきの誰のやったっけ。すごいき速い、ころころころって。」と保育者が言うと、「シンヤ君や」「シンヤ君や。」と子ども達。



タクヤが「これやったら、速いで。」と小さな団子を転がす。保育者が「ほんまや速い。」と言う。子ども達は小さなだんごを作って転がし始めた。保育者は、「じゃあ、先生もタクヤ君みたいがちっちゃいがににする。」と言って、小さな団子を作って転がし始めた。

②「ぬらしたら速くなるで。」とセイヤが言った。保育者が「ぬらしたら速くなる？」と聞くと、「これぐらいやったら、速くできるで。」「これも速いで。」と自分の経験を話す。

少しして、今度は、上から、地面にペットボトルで水を撒き、小さな団子を転がす。とても、速く転がることに気がつき、もう一度上から水を撒く。「もうちょっと、ぬらしたらいい。」といって、水を流しながら、小さな団子を次々と転がし出す。小さな団子を作っては、並べて転がす遊びを始める。



記録者考察

①より

子ども達は団子を転がす遊びの中で、「速さ」に注目をし始めた。きっかけは、保育者の「速い！」という言葉からである。保育者は、子ども達の遊びをよく見ており、今までとは違う速さに反応したのだろう。子ども達も、日ごろから、一緒に遊び、安心できる存在である保育者の言葉をよく聞いていて、今度は、自分の団子を速く転がしたいという気持ちになったと思われる。セイヤは、遊びの中で、小さくて軽いものが速く転がるという経験をしたのだろう。だから、すぐに速さの理由を言うことができた。その言葉から、保育者と一緒に子ども達は、本当に小さいほうが速く転がるかどうか試した。そして、「小さい方が速い」という事実を学んだのである。

②より

「ぬらしたら速くなるで。」のカズセの言葉を聞いて、他の子ども達も水を撒きだした。遊びや生活の経験から、ぬれたところは滑りやすいという事実を知っていたセイヤ。そして、セイヤの言葉から、他の子ども達も同じような経験を思い出したのか、水を撒きだしたのだと考える。そして、実際に水を撒くと、速く転がるという事実が分かったのである。

保育者考察

保育者は、シンヤの団子はどのようにして速く転がるのかということに気付かせたい思いがあったが、意外にあっさり「軽いから」という発想が出たことに驚いた。それはこれまでの経験からの発言ではなく、偶然であったかもしれないが「軽い方が速く転がる」ということについて、その後何度も転がして試している。他の子どもたちは、「軽いほうが速く転がる」ということに試行錯誤してたどりついたのではなく、友だちの言葉を聞き「そうなんだ」と知識として吸収したが、その後実際に何度も試してみることで実感として習得している。

「ぬらしたら速くなる」ことについては、これまでの経験から知っていたのだろうか。水を撒いた山の上から転がすととても速く転がり、何度も試している姿から、その団子の動きに魅力を感じ、繰り返し試してみたい気持ちが感じられる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

・ 速さの比較

団子を速く転がすためには、（土団子の場合）小さくしたらいいことに気がついた。土団子の場合、でこぼこしているので、小さい方が、摩擦力が少ないということを理解した。

・ 摩擦力の感覚

速く転がすために、坂をつるつるにする必要があることに気がつき、水を撒いた。水を撒いたら、摩擦力が低下し、速く転がるので、速く転がすためには、摩擦力を少なくしたらいいことを理解した。つまり、速さには、摩擦力が関係することを感覚的にとらえている。

小学校教育課程

小学校学習指導要領解説

理科編 P22 第3学年 内容 A物質とエネルギー (1)物と重さ 粘土などを使い、物の重さや体積を調べ、物の性質についての考えをもつことができるようにする。

物と重さについて興味・関心をもって追及する活動を通して、物の形や体積、重さなどの性質の違いを比較する能力を育てる。また、それらの関係の理解を図り、物の性質についての見方が考え方をもつことができるようにする。

ポイント50%

2012年7月5日(木)

5歳児

事例

今日は、雨のため、昨日までの土山での遊びが出来なかったので、保育室で、それぞれ好きな遊びを始めた。

①セイヤ、シンヤ、ヨウジ、タクヤが集まり、筒を机にくっ付けている。ペットボトルの蓋を二つくっつけたものを、筒を通して下に滑らせている。その後、シンヤが、積み木を並べている。ケンやマサキも加わった。上から蓋を滑らせる子、積み木で何かを作る子がいる。②上から蓋を落としていくと、積み木を作っているシンヤが、「ケン君はポイント50%、マサキ君はポイント100%」と言った。落ちてくる蓋がどこに転っていくかで判断しているようだ。



(しばらくすると)

①タワーを作って、それに当てる遊びを始めた。

(しばらくすると)

パチンコゲームのような遊びに変わっていた。積み木で門やトンネルを作り、転がして、その中に入れるようにしていた。

記録者考察

①より

子どもたちは昨日までの遊びで、土山での団子作りから、団子転がしへと遊びを発展させていた。そして、ただ団子を転がすだけでなく、土山の坂に桶を並べて、パチンコゲームのようにどこの桶を通るかという遊びをしていた。昨日の団子転がしのイメージがあったのか、今日は保育室で、蓋を転がす遊びをしていた。子どもたちは好きな遊びを見つけて、遊ぶ中で、様々な発見や工夫をして遊びを変化させていくことが分かる。ただ転がすだけの遊びから、転がる先を工夫し、どこに転がるか、転がった場所によって点数が違う等の遊びへと変化していったのである。



前日の遊び

②より

最初はただ転がしていただけであったが、転がした先に、積み木を置き、積み木の置き方をいろいろ工夫していた。転がった蓋がどこに転がって来たかで、点数を決めていた。子どもたちはどこに蓋が落ちるかという偶然性の遊びの中に、数字を当てはめていた。「50」と「100」という数字を比べた場合、「100」の数が大きい(ポイントが高い)ことを理解している。

保育者考察

3歳児・4歳児の時、秋の自然物を使った遊びの中で、木の実を使っての転がし遊びを繰り返し遊んできた。どうやらうまく転がるかと工夫したり、転がすコースやその角度(傾斜)について友だちと一緒に考えたりして作っていた。年長になった6月頃、雨が続き、室内でキャップを二つ合わせてこの遊びが始まった。同じ頃、戸外では赤土山での泥遊びが盛んになっており、赤土山から土団子を転がしては、その速さや形の変化に注目していた。この日は、子どもたちは赤土山のイメージから更に室内での遊びを楽しむために、色々に工夫している様子が伺える。また、これまでの遊びの経験から「ポイント50%」などの発言があり、これをきっかけに遊びながらルールを作り出し、ゲーム性のあるものに発展していったと思われる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・探究心

蓋や積み木を使って遊ぶ中で、子どもたちなりに考えて、もっと面白くするにはどうしたらいいのか考えていた。遊びに必要なものや自分のイメージしたものを、今までの経験を生かしながら作っている。没頭し遊び込むことで、考えたり試したり工夫したりしながら、もっと面白くしたいという探究心が芽生えている。

○学びの芽生え

- ・数についての感覚

子どもたちは、生活や遊びの中で、数を身近に感じる事が多い。幼児期なりに、「数えること」「数の大きさを比べること」という数の発達はある。10前後までは正確に数えることはできるがそれ以上になると、個人差もあるが、数詞との関係が十分に対応できなくなる。しかし、大きな数「50」や「100」という意味のあるかたまり、集合数ということがイメージとしてある。だから、1から100まで正確に数えることができなくても、「50」と「100」では、「100」の方が量として大きいという数についての感覚がある。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」

- ・第1期はじめまして がっこうはじめましてⅡ D-3 ～じぶんたちががっこうたんけん～ 2年生と探検した経験を踏まえ、自分たちでもう一度行きたいところへ行こうとしている。
- ・第2期がっこうだいすき がっこうのこともっとしりたいⅡ F-4 ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～ 学校の中にあるものの数や数字に関心をもち、学校の中のいろいろなものの数を数えたり、数字を探そうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

算数編 P54 第1学年内容 A数と計算 ものの個数を数えることなどの活動を通して、数の意味について理解し、数を用いることができるようにする。

ものとももの対を対応させることによって、もの個数を比べるなどの活動が始まり、やがて、その個数を正しく数えたり、数えたものの個数を数字で表したりすることができるようになる。こうした活動を通して、数の大小や順序を知り、次第に数の意味、100までの数の構成について理解できるのである。

総合的な学習の時間編 P16 目標の趣旨 (4)問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育てること

児童が身近な人々や社会、自然に興味・関心をもち、それらに意欲的にかかわり、問題の解決や探究活動を協同して行う学習の経験が必要である。

すべり台です！

2012年7月13日（金）

5歳児

事例

バケツに水を汲んで、土山の上から水を流していたアキコが、転がったバケツと一緒に坂を滑って下りてきた。①保育者が「あーアキコちゃんが流れてきた。バケツと一緒にアキコちゃんが流れてきた。」と言った。保育者の言葉がうれしかったのか、アキコは、再度坂の上から滑ってきた。それを見たセイヤ、ミエ、ヒロシが同じように滑り出した。「おもしろい。」滑ることのおもしろさに気がつき、次々と滑りだす子ども達。
②「自分で水を汲んでこよう。」セイヤのその言葉で、先週、土団子転がしの時に、水を撒いたら滑りやすいということ思い出したのか、自分で水を撒いた後、滑る子ども達。アキコ「すべり台です。」あつという間に、土山の坂が滑り台になった。保育者が「流れんろう、ジュンくん。後ろから水流しちゃおう。」と言って水を流した後、子ども達は滑っていった。「やったー。滑る、滑る、滑る。」
③その後、ジュンがこの坂を滑らないようにそろそろと上った。その姿を見て、上ろうとするミエ。保育者は、「ミエちゃんに、教えちゃって。どうやってやったか教えちゃって。」とジュンに言うと、坂を上るのをジュンがミエに教えてやっていた。その後、ジュンは、下りる時も滑って下りるのではなく、立ったまま転ばずに下りていた。



記録者考察

①より
 先週は、土山の坂で、土団子を転がす遊びだったが、先週の遊びのイメージが残っていて、今日は、土団子ではなく、自分達が滑る遊びになっていた。アキコが滑ったその瞬間を捉え、保育者は「流れてきた」と表現したのだ。日ごろから心を寄せている保育者の言葉を子ども達はよく聞いていて、自分達もアキコのように滑ってみようと思ったのだろう。やってみると、滑ることが面白いことに気がつき、滑る遊びを始めたのだ。

②より
 セイヤは、滑る時に土団子の遊びを思い出したのだろう、速く滑る楽しさを味わうために、水を撒くことを思い出した。セイヤが水を撒いて速く滑っているのを見て、自分もやってみようとする子ども達。保育者の援助で、セイヤの言葉や動きが次への遊びへと発展していった。

③より
 子ども達は、友だちとかかわりを深める中で心が動かされ、子どもなりに新たな世界に気付くことがある。ミエは、ジュンの行動を見て、自分もやってみようとする滑る坂を上るといふ新しい挑戦を始めたのだ。友だちの様子を見て、模倣したり、一緒に遊んだりすることで、仲間意識が高まっていくのである。

保育者考察

この日以前にも赤土山を滑って遊んだことがあった子ども達。この日は、土団子を転がした後ということもあり、更に自分たちが滑ることが楽しくなったようだ。その中で、水を流すと滑りやすいこと、山を上る時には足を踏ん張って歩かないと山肌は滑りやすいことなど、それぞれの場合にに応じて自然に体の使い方を工夫していることが伺える。

年中の時には泥遊びに抵抗があったジュンだが、年長になり友だちの誘いをきっかけに全身を使って伸び伸びと泥遊びを楽しむようになっていた。ミエは、汚れることに抵抗はないものの、ダイナミックな泥遊びではなくままと遊びのなかで泥に触れて遊ぶ程度の経験だった。運動面があまり得意でないミエが、ジュンを見て自分もやってみようとした様子だったので、保育者はジュンに「教えてあげて」と声をかけた。ミエはジュンの話を聞いたり、登る様子を見たりして、足を踏ん張り自分も上がってみた。ミエは何度も繰り返すうちに足取りがしっかりし、ジュンはミエに教えたことが自信につながったようであった。

隣で遊んでいる友だちの様子に興味を示し、すぐに仲間入りしていることから、自分が遊んでいる時でも常に友だちの様子を気にかけてながら、何か楽しそうなことをしている友だちがいると興味をもってみていることがわかる。また、保育者の何気ない一言がきっかけとなり遊びが発展することもある。保育者は常にアンテナを張り、子ども達の様子を適切にとらえていかなければならないと思う。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・ 分析力
- ・ 試す力

子ども達は、自分のまわりのものや人にかかわり、自分にとって意味や価値のあることに会った時、心が動かされる。そして、心が動いた時、自分もやってみようと思うのである。その時、今までの遊びや生活の中で得た情報を思い出したり、試してみたりしながら、既習の知識と経験とを結び付けていくのである。そこで得たものは、さらなる知識となっていく。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき F-1 がっこうのこともととしりたいな I～やってみようことにちょうせんしよう～ これまでの学校探検の経験をもとに、自分でやってみようことやもっと行ってみたいところなどを考え、学校の施設や自然、人などにかかわろうとする気持ちをもつことができる。

小学校学習指導要領解説

生活編 P16 目標 (3)身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めることを通して、自分のよさや可能性に気付き、意欲と自信をもって生活することができるようにする

身近な人々、社会及び自然とのかかわりを深めるためには、人や社会、自然と繰り返しかかわることが欠かせない。繰り返しかかわる中で、対象に働きかけ、対象から働き返されながら、相互に交流し合い、互いのかかわりが深まっていく。

総合的な学習の時間編 P13 目標の趣旨 (1)横断的・総合的な学習や探究的な学習を通すこと

身近な学習対象（ひと・もの・こと）とかかわって、自分にとって意味や価値のある課題を設定する。その課題について、体験活動をしたり、調べたりしながら、必要な情報を取り出したり集めたりしていく。

自然と遊ぶ

3 自然に触れ、自然物を通して気づいたこと感じたことなどイメージを膨らませた遊びをしようとする

4～3月頃

5歳児

子どもたちは、草花、虫、水、風などの自然を敏感に感じながら、かかわっている。自然に出会い、心が動かされ時、子どもたちは、たくさんのことを学んでいる。

7/6

子どもたちは、身近な昆虫であるありに興味津々である。ありについて、いろいろな知識も持っている。ありについて、自分の知っている知識を、紹介し合っている。



7/6

木の表面にいる小さな虫を発見した。まるで、人間に見つからないように、木に化けて隠れているように感じた時、思わず出た言葉。「木に化けちゅう。」



12/10

水たまりの水が氷になるぐらい寒かった冬のある朝。子どもたちは、氷をたくさん集めた後、今度は、自分たちで、氷を作ろうと考え、知恵を出し合い「こおりのじっけん」を始めることにした。



12/11

次の日、氷ができるのを楽しみに来た子どもたち。しかし、氷が出来ていなかった。そこで、今度は、どうしたら、氷ができるかもう一度自分たちで考え、氷作りに挑戦することにした。



育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・表現力
- ・感性
- ・見通しを持つ力
- ・検討する力

○学びの芽生え

- ・生き物への関心

スタートカリキュラム

I-1 くさばなあそびをしよう

K-4 がっこうでおせわになったひとにてがみをかこう

小学校教育課程

- ・生活編 P31 第1学年及び第2学年 内容(5) 身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりできるようにする
- ・理科編 P7 理科の目標 見通しを持って観察、実験を行うこと
- ・理科編 P29 第3学年 内容B生命と地球(2) 身近な自然の観察
- ・理科編 P30 第3学年 内容B生命と地球(3) 太陽と地面の様子
- ・理科編 P35 第4学年 内容A物質・エネルギー(2) 金属、水、空気と温度
- ・国語編 P7 国語科改訂の要点(1)(3)

お家の鉄筋も食べる！

2012年7月6日（金）

5歳児

事例

土山でありを見つけて、自分の知っていることを友だちどうして話をするセイヤたち。「大きいありを見つけた。」ありのお腹をつつくと、白いものが出てきた。「たまご？」と記録者が聞くと、①「違う。あまいどろどろしたもの。背中につけて、ありのおうちに運ぶが。ありのおうちに行ったら、これを出して、みんなにやるが。」と教えてくれた。

（少し時間が経って）

「やっぱり（白いの）卵やった。」「どうして、分かったが？」と聞くと、「ぼくが教えてあげた。」と一緒にいたジュンが答える。

友だちから聞いて、卵ではない、と思っていたものが、やっぱり卵だったと、訂正に来てくれていた。

（また、少し時間が経って）

②「水に濡れても大丈夫なありもおる。」「これ、飛べるあり。羽がついちゅう。」「これ、お家の鉄筋も食べる。」「お家の部品も食べる。」と羽をつけたありを見つけたジュンたちが話をしていた。



記録者考察

①より

自分の知っていることについて友だちと会話をする子どもたち。自分が興味を持ったことについて、本当によく知っている。経験からの知識も多く、アリは普通水に弱いものだが、水に濡れても平気なアリを見たのか、「水に濡れても大丈夫なアリもおる。」と言ったり、シロアリに家がやられることを聞いたり、テレビで見たり、図鑑で調べたりしたのか、「お家の鉄筋も食べる。」「お家の部品も食べる。」と言っている。こんな小さなアリでも、すごい力があることを子どもなりに知っているのである。子どもたちは身近なアリという昆虫に対して興味や関心を抱くとともに、自分たちの生活との関連に気付いている。つまり、この羽の付いているアリが、自分たちの家を食べるということ、アリが自分たちととても関係があることに気付いている。

②より

知っていることを、友だち同士で伝え合い、また、アリのことについてあまり知らない子どもたちも、友だちとの会話で自分の知らない世界を知ることになるのだろう。そして、自分が知ったことを誰かに伝えたいという思いが湧いてきた時に、自分の言葉で表現するのである。何かがわかったとき、それを誰かと共有しながら自己を充実させていくのは、学びの原点であるといえる。

保育者考察

自分の知っていることを話したり、友だちの話の聞いたり、言葉のやりとりも楽しい様子が伺える。自分の話すことに対して、友だちが興味を示し、うなずいたり驚いたりしながら聞いてくれることは嬉しく、自信につながっていると思われる。この頃、図鑑で色々なことを調べることが楽しくなっている時期であり、この後、友だちと頭をつき合わせて調べたことも想像できる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・ 生き物への関心

生き物に触れる中で、「知りたい」という気持ちを膨らませ、様々なことに気付いたり、自ら調べたり考えたりすることがある。また、感じたことや経験したこと、知ったことを自分の言葉で話し、伝えあう楽しさを味わう。

小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき I-1 はるとなかよくなるう I ～くさばなあそびをしよう～ 草花遊びを通して自然に触れながら、自然や友だちと仲良くなることができる。

小学校学習指導要領解説

生活編 P31 第1学年及び第2学年 内容(5)身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わることに関心、自分たちの生活を工夫したり楽しんだりできるようにする。

繰り返し自然と触れ合うことや、自分なりの思いや願いをもって進んで自然とかわることによって、自然のすばらしさを十分に味わう姿が生まれる。

理科編 P29 第3学年 内容 B生命と地球 (2)身近な自然の観察 身の回りの生物の様子を調べ、生物とその周辺の環境との関係についての考えをもつことができるようにする。

生物は、色、形、大きさなどの姿が違い、その周辺の環境とかわって生きている。生物を愛護する態度を育て、身の回りの生物の様子やその周辺の環境との関係についての見方や考え方をもちることができるようにすることは大切なことである。

木に化けちゅう！

2012年7月6日（金）

5歳児

事例

①コケのついたような木の表面に小さな虫を発見し、「虫がおる！」と保育者に報告するユウジ。保育者が木の幹を見ると、木の皮に似た小さな虫がたくさんいた。「いや、ほんまや。虫がおる。よう見つけたね。分からんねえ。」と保育者。保育者の声を聞いて、何人かの女の子が近づいてきた。

しばらく、みんなで保育者と一緒に、木の表面にいる虫を見つけていた。

「あっここにもおる。」「あっここにも。」

②その時、虫を見つけたユウジが、

「木に化けちゅう。」

と言った。虫が木の表面に同じような色をしてくっついている様子を見て、思わず出た言葉である。



記録者考察

①より

虫は、敵に見つからないように、周りの色に近い色をして目立たないようにすることがある。子ども達は、昆虫の保護色や擬態についての知識はないかもしれないが、このように生活の中で、「虫が見えにくい姿である」という事実をユウジは知ったのである。今後、図鑑で調べたり、昆虫の保護色や擬態についての学習をしたりした時に、この日の場面を思い出し、より深く納得するのではないだろうか。

②より

ユウジの表現がとてもいい。子ども達の会話は、そのまま「詩」になる。木と同じ色をしている虫を見て、「木に化けちゅう！」という表現は、子どもの中から出てきた本当に素直な言葉である。自分の気持ちが揺り動かされると、誰かに伝えたいという気持ちになる。自分の思ったこと感じたことを言葉に表し、友だちや保育者等に共感してもらうことで、ますます、伝えたい、言葉で表現したいという意欲につながる。子ども達のこの感性を保育者が認めることで、さらに子ども達の感性は磨かれるのである。

保育者考察

コオロギを見つけて捕まえ、何を食べるのだろうかと調べて飼育したり、ザリガニ釣りに出かけて釣ってきたザリガニを保育室で育てたりと、様々な形で生き物とかかわってきている子ども達。新しい発見に驚き、またワクワクした気持ちも伝わってくる。こんな気付きを更にひろげていくことが保育者の役目だろう。「なんだろう？」から「わかった」につなげるために、図鑑で調べることを提案したり、目につくところに図鑑を準備したりしていこうと思う。

ユウジの発する言葉はいつもストレートで的を射ている。虫にも関心が高いユウジは、自分が発見したことが嬉しく、木と同じ色をしていて一見わかりにくいその虫に興味をもっていただろう。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・表現力
- ・感性

子ども達のまわりには、様々な美しいもの、不思議なものがある。子どもはそれに気付き、様々なことを感じ取る。それは、表現のもととなる大切な体験である。虫を見つけたことを保育者に受け止めてもらったので、「木に化けちゅう。」という新しい発見につながり、表現のもととなる感性を育む。

○学びの芽生え

- ・生き物への関心

身近な生き物とのかかわりの中で、生き物との出会いを通して、不思議さなどを感じ取っていくのである。そして、さらに周囲の様々な環境に興味を持ちだし、もっとかかわりたいという気持ちを持つことができる。

小学校教育課程



スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第3期みんななかよし K-4 みんなであそぼう なかよくなるII ～がっこうでおせわになったひとにてがみをかこう～ 学校の中で出会った人やお世話になった人に自分の気持ちを伝え、人との出会いを楽しむ。

小学校学習指導要領

理科編 P29 第3学年 内容 B生命・地球 (2)身近な自然の観察 身の回りの生物の様子を調べ、生物とその周辺環境との関係についての考えをもつことができるようにする。ア 生物は、色、形、大きさなどの姿が違うこと。イ 生物は、その周辺の環境とかかわって生きていること。

身の回りの生物の様子やその周辺環境について興味・関心をもって追求する活動を通して、身の回りの生物の様子やその周辺環境とのかかわりを比較する能力を育てる。

国語編 P7 国語科改訂の要点 (1)目標及び内容の構成 (3)言語活動の充実語感を養うことは、一人一人の児童の言語生活や言語活動を充実させ、ものの見方や考え方を個性的にすることに役立つ。

学校や児童の実態に応じて、様々な言語活動を工夫し、その充実を図っていくことが重要である。

こおりのじっけん

2012年12月10日(月)

5歳児

事例

今朝は、この冬一番の寒さで氷点下を記録した。園庭の水たまりには、何ヶ所か氷が張っていた。ナオコは、プランターに張っていた氷をタエコやマサシ、シズカの4人で大きなタライに集め、土や葉など汚れがついている氷を水で洗っていた。分厚い氷なので、水で洗っても、すぐには解けなかった。

①ナオコが、いくつものバケツに水を入れ出した。「氷を作る。」とのことであった。バケツを持って、②「どっかの日陰。こうやって(日なたに)置いちゃだめで。ここ(日陰)ならいいけど。」と言って、フェンス沿いの日陰にバケツを並べた。そして、保育者を連れてきた。保育者の「みんなに分かるように置いちゃかなあよ。水まかれるで。なんか、書いたら。」という言葉に、「『氷を作ってるからまかないで』って書いちゃって、上に載せちよく。」と答えるナオコ。「凍るろうかねえ。」という保育者の言葉に、「じっけん。じっけん。」と答えるシズカ。②「ひやい所やったら、固まるかもしれん。」というシズカに、「ここよりひやい所探してみる?」と答える保育者。「太陽があるさね。」とマサシ。



今度は、ナオコが、もっとたくさん氷を作るために、小さなコップを並べはじめた。コップに水を入れるナオコとマサシとシズカ。水を入れながら、どこに置けばいいのか話をしていた。マサシは、太陽に手の平を向けて、「こうやったら、マサシの手が赤い。」と言っていた。

たくさんコップに水を入れ、上にお盆を載せて蓋をしたら、「今度は持って行こう。陰の所へ。」とナオコ。フェンスの陰に置いていたバケツも、もっといい所を探してみんなで運ぶ。

ツヨシ達がやって来ると、「じっけんしゆうが。手伝ってくれる?」とみんなを誘い、氷を作る場所を探す。何をしているか見に来た友だちに、「こおりのじっけん。こおりに作るが。」と答えるナオコたち。最初は、ウサギ小屋に置こうとしたが、人が入って来るので、人が来ず、ずっと日陰になっているウサギ小屋と倉庫の隙間に決めた。

記録者考察

①より

とても寒い朝、氷が張っていたのを見て、最初は氷を集めて楽しんでいたが、今度は、自分で氷を作りたいと考えた。水が凍ると氷になることを知っていたナオコたち。水を一晩置いて、氷を作ることにした。

②より

氷を作るために入れ物に水を入れた。今度は、どこに置けば氷になるか考えた。ナオコやシズカは、日陰や冷たい所だと凍ると考えた。マサシは、太陽が直接当たらないところを考えていた。最初バケツを置いたフェンス沿いは、今は日陰だけど、太陽が当たるかもしれないということにマサシは、気がついたのかもしれない。だから、「太陽があるさね。」と言ったのだろう。太陽に手をかざすと手が赤くなる、と太陽の光はものを暖める力があることをマサシは、実感していたのかもしれない。

保育者考察

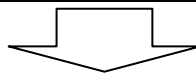
取り出した氷の状態ではなく、プランターから直接自分たちで氷を取り出したので、水を入れておくと氷になるかもしれないという発想につながったのではないか。氷についていた土や草を水で洗っていたが、その時の氷が水にぬらしても解けないぐらいの厚さがあったから水をかけても大丈夫だと思ったのだろう。また、自分たちが発見した氷をきれいな状態にしておきたいという思いと、水で洗うことでキラキラ光る氷に魅力を感じていたのではないか。寒いと凍るということは、保育者の投げかけがなくても自分たちで気付いていて、「夜のうちに凍る。お日さんが出たら、暖かいし、解けてくるで。」と言っていた。

「何か書いておいたら。」という投げかけは、保育者がこの時、声をかけなくても、実験の過程の中で気付いていたのかもしれない。子どもたちは、空気の冷たさ、暖かさを肌で感じたり、自然と遊びの中で、水や氷、太陽などの性質に気がついたりしている。冷たい水(氷を解かした水)を日陰に置くと、氷になる時間も速いのではないかという会話も聞かれ、いろいろな方法で試してみようとする姿が見られた。

育っているもの

確かな学力につながる基礎
〇学びを支える基礎
 ・ 見通しを持つ力

子どもが自然に親しむことによって見いだした問題に対して、予想や仮説をもち、それらを基にして観察、実験などの計画や方法を工夫して考えること。



小学校教育課程

小学校学習指導要領解説

理科編

・P30 第3学年 内容 B生命・地球 (3)太陽と地面の様子 イ 地面は太陽によって暖められ、日なたと日陰では地面の暖かさや湿り気に違いがあること。

太陽の光が当たっている地面と当たっていない地面の暖かさや湿り気を体感や温度計などで調べ、それらに違いがあることをとらえるようにする。

・P35 第4学年 内容 A物質・エネルギー (2)金属、水、空気と温度 ウ 水は、温度によって水蒸気や氷に変わることをとらえる。

水の温度を0℃まで下げると、水が凍って氷に変わることをとらえる。

こおりのじっけんⅡ

2012年12月11日（火）

5歳児

事例

昨日、氷を作る実験をしようと準備をしたナオコ達。ナオコは、今朝登園してすぐ、氷が出来ているかどうか見に行ったが、氷はできていなかった。タエコやマサシ達も後から見に行った。①「氷出来てない。」「あっちは、固まっちゅうけど。」3、4歳児達も氷を作ろうとコップに水を入れて園庭に置いていたのだが、それらは、氷になっていた。そこで、タエコ達は、バケツやコップの場所を奥から前へずらした。昨日は、数本竹を横にして置いてあったその下に隠すように入れていたのだ。「出しちゃったら固まるで。」「冷たい風が当たるき。」とタエコ達。



②保育室に戻って、ナオコ達は、「こおりのじっけん」と書いた紙に、「×」と書いていた。



記録者考察

①より

タエコ達は、氷が出来なかった理由として、竹の下に入れていたからと考えたようだ。3、4歳児のコップは、そのまま園庭に出していたので氷になっていたことと比べたようだ。昨日は、日陰に置くと氷ができると考えたが、日陰だけでは氷が出来ないことに気がついた。そこで、竹の下から前に引き出したのだ。氷を作る条件の一つ今日は増やして、引き続き実験をすることにしたのだ。

②より

昨日、「こおりのじっけん」と書いて、実験ノートにナオコとタエコとカナの3人で書いていた。その実験ノートに、今日は「×」と書いていた。数日先まで書く欄を作っており、どの入れ物に氷が出来るかを調べるように作っていた。

保育者考察

昨日の実験結果を楽しみにいち早く園庭に出たナオコ。凍っていないバケツを見て、「今日は、昨日より暖かいき、ほんでや。今日は失敗。」とつぶやき、氷が出来なかった原因を考えていた。タエコたちが登所し、再び一緒に見に行くと、3、4歳児が前日から作っておいたものは、凍っていることに気が付き、自分たちの方法との違いを考えた。自分たちが置いた場所と、3、4歳児が置いた場所との違いに、すぐに気がつくであろうと保育者も予想していたが、「冷たい風が当たるき」といった発想に驚いた。陰に置くと凍るといふことには、初めから気付いていたが、今日の実験の結果から、風の当たるところのほうが、より効果があるということに気付いたのであろう。失敗経験から、「次はこうしてみよう」という新しい方法を試すことにつながったり、氷ができる（成功する）までの経過を楽しんだりしている気持ちが「実験ノート」から感じ取れる。氷の実験ノートは、前日に子どもが作っていたものだが、一日ずつ結果が書き込めるように線を引いて、表が作られていた。昨日の時点で、子どもは先を見通し、実験を何日も続けようという気持ちがあったのではないか。

翌日の朝、皿や容器に張っていた水に薄い氷が張っていた。触れると割れてしまいそうな薄さだったが、子どもたちは「竹からだしておいちゃったき。大成功や。」と喜び、早速実験ノートに○と記入していた。

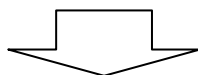
育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・ 検討する力

予想や仮説と観察、実験の結果が不一致になると、予想や仮説を振り返り、それらを見直し、再検討を加えなければならない。このような過程を通して、児童は自らの考えを絶えず見直し、検討する態度を身に付ける。



小学校教育課程

小学校学習指導要領解説

理科編

・P7 理科の目標 見通しを持って観察、実験を行うこと

自らの生活経験や学習経験を基にしながら、問題の解決を図るために見通しをもち、児童が自ら目的、問題意識をもって意図的に自然の事物・現象に働きかけていく活動を行うことが大事である。

・P35 第4学年 内容 A物質・エネルギー (2)金属, 水, 空気と温度 ウ 水は、温度によって水蒸気や氷に変わる。

水の温度を0℃まで下げると、水が凍って氷に変わることをとらえる。

劇遊びをしよう

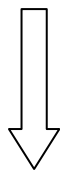
4 友達と互いに考えやイメージを出し合いながら、協力して遊びを進めていく充実感を味わったり、表現したりする楽しさを味わう

11月下旬～12月上旬頃

5歳児

12月14日の発表会で5歳児は、劇の発表をすることになった。この発表会に向けて、劇遊びが始まった。

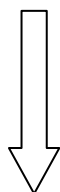
11/ 19



「かさじぞう」の劇をしようという共通の目的に向かって、遊びが始まっていった。この日は、みんなで、劇の中のお話の流れや、登場人物のセリフを考え、出し合った。保育者は、子どもたちから出た意見に共感しながら、子どもたちが考えたイメージをつなげたり、考えを具体的に言葉に表して整理したりしていた。



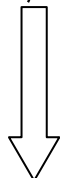
12/3



劇に使う小道具をみんなで作った。自分たちで育てて収穫した稲を脱穀し、その時の藁で笠を作ったり、劇で使う背景もみんなで協力したりしながら完成させていた。



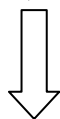
12/3



劇の登場人物ごとにチームとなり、自分たちで必要な小道具を相談し、作っていた。ウサギチームが自分たちでウサギの耳を作ることにしたのを、ネズミチームが見て、自分たちもネズミの耳を作ることにするなどしながら、小道具作りを楽しんでいた。



12/5



みんなで話し合っ作った「かさじぞう」の劇、全体の練習が始まっていた。舞台でも、子どもたちは、その場で考えた動きやセリフを言うなど自分たちで劇を作り上げる姿があった。



12/14
当日へ

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・協同性
- ・問題解決力

○学びの芽生え

- ・コミュニケーション力
- ・表現力

小学校教育課程

スタートカリキュラム

J-3～4 どうぶつらんどで げんきにあそぼう すてきなどうぶつ つくっちゃおう
K-1～3 なかよししゅうかいをしよう

小学校学習指導要領解説

国語編 第1学年及び第2学年

- ・ P32～33 内容A話すこと聞くこと
- ・ P41 内容C読むこと
- ・ P43 伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項

音楽編 P23 第1学年及び第2学年 内容A表現

図工編 P24 第1学年及び第2学年 内容A表現

お話を考えよう！ ～劇遊び①～

2012年11月19日（月）

5歳児

事例

12月14日の発表会に向けて、劇遊びが始まった。「かさじぞう」の劇をすることに決定し、11月16日にセリフを考えるよう保育者は、みんなに投げかけをしていた。今日は、どんな「かさじぞう」にするかみんなでお話を作った。



保育者「今日そろそろみんなでお話を作って、『かさじぞうごっこ』しようかなと思って。どうやって、言おうかなって、言葉を考えてようと思いう。」と言い、子ども達と話しながら、お話を作っていった。ジュン「もうすぐお正月なのに、何にも買えんのう。」コハル「そうですね。」と考えたセリフを言う。「おじいさんどこ行くの?」「町にかさを売りに行くんだよ。」「一緒に行こう。」とみんな次々と考えたセリフを言っている。

①コハルの「おじいさんがお餅を持ってきてくれて、ねずみさんとうさぎさんでお餅を食べるが。」というお話のイメージに対して、保育者は、「最後のところ、お地蔵さんがお餅とか野菜を持ってきてくれた時に、ウサギさんも呼んじやるが。食べさせちゃるが。そうかいねえ。」と共感しながら、具体的に言葉に表して整理していた。ヨウジ「ウサギにかさをかぶせちゃる。」アキコ「団子作ってあげるが。」「お地蔵さんの下に置くが。」等いろいろな意見を保育者は受けとめ、「ヨウジ君がウサギにかさをかぶせちゃるって言いう。」と出てきた意見を全体に投げ返していた。

②「お面作らないかん。」「シッポも作らないかん。」「団子を粘土で作ったらいい。」「おじいさんにあげる団子、おじいさんの形にしたらいい。」「雪はどうなる?」等イメージしたことをどのように表現するのか話もしていた。

記録者考察

①より

「かさじぞう」の劇をしようという共通の目的に向かって、互いの思いやイメージを伝え合えるように、話し合いを行った。保育者は、子ども達と視線を合わせるように座り、子ども達同士が近くになるように座らせ、自由に思いや考えを出せるようにしていた。保育者は、子ども達から出た意見に共感しながら、子ども達が考えたイメージをつなげたり、考えを具体的に言葉に表して整理したりして、共通化していた。

②より

今日は、お話を考える時間だったけれど、子ども達の中で、お話のイメージが共通のものになっていくと、自然に、劇の準備物についての考えも出てきていた。準備物をイメージすることで再度、お話のイメージも確かなものになっていくと考える。

保育者考察

カレンダーに「はっぴょうかい」と書き入れるとすぐに注目し、「劇は何にする?」「楽器は?」と、子ども達は昨年までの経験から発表会のイメージがわき、期待をもっている様子だった。1学期からの稲作の体験を生かし“自分たちの劇”にしてほしいという思いがあり、保育者が投げかけると、子ども達から「かさじぞうがいい」という意見が出た。本来のお話はすげの笠だが、子ども達のイメージの中では、藁と笠がつながったのだと思われる。

かさじぞうのストーリーは理解できている子ども達。登場人物に加えてウサギやネズミを登場させたいと話したり、餅つきや団子を作ってはどうかとアイデアを出したりしていた。お話の世界から自分なりのイメージを膨らませ、思い描き、そのイメージを言葉に表している。うまくは言えなくても、一生懸命話そうとする姿に友だちが注目してくれたり、「それいいね」と賛同してくれたりすることで、自信につながっていると思われる。劇遊びに向かうなかでは、自分たちで遊びを作り上げていくことやそれを楽しむことともに、周りの友だちが自分を受け入れてくれるという安心を感じ、仲間関係も育ってきている。

育っているもの

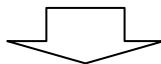
確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・コミュニケーション力

保育者は子どもが話しかけやすい安心感を持ち、なんでも受け止めてくれる雰囲気をつくることによって、子ども達が安心して自分の思いや考えをことばで表現することができる。その積み重ねによって、今度は、子ども達同士の中で、友だちの意見や考えを聞いたり、話したりすることができる。

小学校教育課程



スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし K-1～3 みんなであそぼう なかよくなるう I～なかよししゅうかいをしよう～ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむことができる

小学校学習指導要領解説

国語編 第1学年及び第2学年 内容

P32 A話すこと聞くこと オ話し合うことに関する指導事項 ②言語活動例 イ尋ねたり応答したり、グループで話し合って考えを一つにまとめたりする言語活動

考えを一つにまとめるためには、自分の考えを出し合ってから、グループで考えをまとめていくような過程が大事である。

P43 第1学年及び第2学年【伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項】ア伝統的な言語文化に関する事項(ア)昔話や神話・伝承などの本や文章の読み聞かせを聞いたり、発表し合ったりすること。

児童が伝統的な言語文化としての古典に出会い、親しんでいく始まりとして、昔話や神話・伝承などの読み聞かせを聞いたり、それらを発表し合ったりする。また、話の面白さに加え、独特の語り口調や言い回しなどにも気付き親しみを感じていくことを重視する。

準備をしよう ～劇遊び②～

2012年12月3日(月)

5歳児

事例

14日の発表会で行う劇「かさじぞう」に向けて準備を進めている5歳児たち。今日は、劇に使う小道具を作ることになった。

①子ども達は、春、幼稚園の庭の一角に作った田んぼで稲を育てていた。収穫した稲を自分たちで脱穀し、その時の藁を使って、笠を作ることにした。厚紙で作った笠に藁をかさの長さに合わせて切って貼り付けていた。

劇に使う背景も自分たちで色を塗って仕上げる。アイコ、サキコ、レイナ、ユウコの4人で壁の絵を黄土色で塗っていたところ、②アイコが、すでに茶色で塗っていた場所に黄土色の絵の具を垂らしてしまった。「あっ。」「何しているの?」「ちゃんとこうやってしなきゃ。」「先生に言わなきゃ。」とサキコたち。しかし、サキコが「ティッシュ。早く。」と言うと、アイコは、ティッシュを持って来て、自分が絵の具を垂らした場所を拭いてみた。少し色は残っていたが、サキコは「ちょっと戻ってない?似た色だから大丈夫じゃん。」と言って、自分たちで解決した後、また、4人は一緒に壁の色を塗り出した。



記録者考察

①より

昔話に出てくる小道具は、今の子ども達にはなじみがないものが多い。笠は、おじいさんが藁で編み、これを売りに行くという劇の大事なキーワードになる小道具である。子ども達は、なかなかこの笠のイメージが出来にくいと思うのだが、実際に藁を使って作ることで、よりイメージが具体的になるのだろう。お地蔵さん役の子ども達は、自分がかぶる笠を作るのに、藁をつかみし、画用紙の笠の長さに合わせ、その長さに切ってから、貼っていた。

②より

背景も自分たちで塗っていたのだが、間違ったり失敗してしまったりすることもある。そんな時には、保育者に伝えて解決してもらおうという方法もあるが、サキコたちは、ティッシュで拭いたらいいのではないかと考えた。ティッシュで拭くと少し後が残るのだが、「似た色だから大丈夫。」というサキコの言葉にアイコもほっとしただろう。自分たちで考えて解決していくということは、自立に向けての第一歩である。

保育者考察

子ども達は3年間の園生活のなかで色々な絵本や物語にふれ、イメージを豊かにひろげることができるようになってきている。「かさじぞう」に限らず色々な昔話に出てくるであろう「笠」、子ども達は実際に被ったことはなくてもすぐにそのイメージはわき、製作に取りかかっていたと思われる。

日頃から、間違ったり失敗したりしても全否定はせず改善方法を一緒に考えたり、失敗の原因を探ることで解決方法を自分で模索できるように援助していることが、いかされたのではないかと考える。絵の具が垂れてしまったことで困っていたアイコだったが、サキコの「だいじょうぶ」という言葉で、失敗しても解決する方法はあることや、誰かが助けてくれるという安心も感じたのではないだろうか。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

- ・問題解決力

子ども達は、表したり見たりしながら意欲的に活動する中で、つくりだす喜びを味わい、自分の思いの実現を図ることができる。

○学びの芽生え

- ・表現力

子ども達自身が自分で考えて自分で行動することで、自分が生活の主体者であることを実感することができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし

- ・J-4 どうぶつらんどへようこそIV～すてきなどうぶつ つくっちゃおう～ お気に入りの動物を粘土で表すことを楽しんだり、粘土で表したいことを友だちや先生に伝えたりすることができる。
- ・K-2～3 みんなであそぼう なかよくなるう I～なかよししゅうかいをしよう～ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむことができる

小学校学習指導要領解説

図工編 P24 第1学年及び第2学年 内容 A表現 イ 感覚や気持ちを生かしながら楽しくつくること

手などで触りながら材料をとらえる感覚、自分の体で大きさや長さをつかむ感覚、形や色に対する児童の気持ちを大切にしながらつくること。

ウサギの耳を作ろう ～劇遊び③～

2012年12月3日(月)

5歳児

事例

ウサギ役のサキコ、レイナ、ユウコ達は、背景の色塗りが終わったので、この後、3人で何を作るのか相談し、ウサギの耳を作ることにした。3人は保育者のところに行き、ウサギの耳を作りたいということを伝えた。保育者は3人の話を聞き、白い画用紙を渡した。



①その後3人は、どうやって耳を作るのか相談した後、「これに鉛筆でこうやって、描いて切る。」と決まったら、机のところに行き、自分たちでウサギの耳を作っていた。

そこへ、別の背景を仕上げているネズミ役のアキコ、ケン、マサヒコ、ヒロシがやって来て、ウサギ役のサキコ達が耳を作っているのを見ていた。

②そこへ、保育者が来て、「ネズミさんはどうする？」とアキコ達に聞いた。「チュリコ(幼稚園で飼っているネズミの名前)ちゃんの耳を見てくる？」と言うと、「耳描く。」とネズミ役の4人。保育者は、「ネズミチームさん、決まったらあそこに画用紙があるき、いるものがあつたら言いに来てね。」と言った。その後、ネズミ役の子ども達は、ウサギ役のサキコ達と一緒にネズミの耳を描いていた。



記録者考察

①より

ウサギの耳をどうやって作るのか、イメージや考えをお互い伝え合いながら、実現していくサキコ達は、友だちと協力する楽しさ、思いが実現していく面白さや楽しさを味わっているのではないだろうか。

②より

保育者は、ネズミ役のアキコ達に、「ネズミの耳を作ったら。」とは決して言わなかった。子ども達にどうするか投げかけ、子ども達自身に決めさせていた。そして、アキコ達は、ウサギ役のサキコ達のようにネズミの耳を作ることにした。保育者は、アキコ達が考えたことを実現するために、必要な材料を提示したり、アドバイスを与えたりしていた。保育者は、それぞれの役で一つのチームとなり、劇を成功させるためには何が必要か、そのためにどうしたらいいのか考える機会を与え、子ども達自身が友だちと一緒に考えたり工夫したり取り組むことができるような援助を行っていた。

保育者考察

ウサギ役の3人は、普段から製作が好きで、色々な素材や道具で作ったり描いたりすることを楽しんでいる。保育者はこの3人であれば、アイデアを出し合ったりしながら自分たちで作業できるだろう、まかせていても大丈夫だろうと考え、特にアドバイスしたり、どうするか聞いたりはしなかった。3人は自分たちでどんなものを作ろうかと話し合い、形にしていく過程を楽しみ、わくわくしながら作っていただろう。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

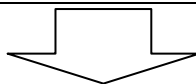
- ・協同性

友だちの話や保育者の話を聞き、自分の考えを調整しながらクラスやグループとして活動を進めていくことにより、自分の思いと友だちの思いに折り合いをつけていくことができる。

○学びの芽生え

- ・コミュニケーション力

クラスやグループで話し合う機会を通して、自分の考えやイメージを相手に分かるように話したり、友だちの話を最後まで聞いたりすることにより、みんなですいたらよいか考えることができる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし K-2~3 みんなであそぼう なかよくなるろう I~なかよししゅうかいをしよう~ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむことができる

小学校学習指導要領解説

国語編 P33 第1学年 内容 A話すこと・聞くこと オ話し合うことに関する指導事項 ②言語活動例 イ 尋ねたり応答したり、グループで話し合って考えを一つにまとめたりする言語活動

グループで考えをまとめていく過程を重視しながら、最終的に考えを一つにまとめていくことを求めている。

昨日よりできた ～劇遊び④～

2012年12月5日(水)

5歳児

事例

みんなで話し合っって作った「かきこじぞう」の劇。チームで協力して、小道具も仕上がった。今日も、発表会に向けて、みんなのイメージを言葉や動きで表現していった。11月19日にお話し作りを始めたが、その時に考えたセリフを入れた内容になっていた。お正月の歌を入れるなど、工夫をしていた。

①まだまだ、子ども達は、言葉が抜かかったり、どこに動いていったらいいのか分からない時もあったが、一緒に役の友だちの動きに合わせてたり、セリフを思い出したりしていた。

劇が終わった後、「昨日よりできた」という子ども達の感想。少しずつ本番に向かって仕上げをしているところである。



記録者考察

①より

14日の発表に向けて、予行練習をし、また、改善を加えながら劇を仕上げていく5歳児達。登場人物もみんなで話し合っって、「かきこじぞう」のお話には出てこない、ネズミやウサギもいて、このクラスでしかできない自分たちが作った劇になっていった。

保育者考察

幼稚園で取り組む劇遊びは、すべてのセリフを覚えて間違わないように言うといった台本に沿った劇ではなく、子ども達が思いを出し合いながらセリフや動きを自分たちで考え、自分たちですすめることを大切にしている。そのため、始めのうち、セリフは毎回同じではないし、動きもやるたびに違う。そこを子ども達は「こうした方がいいんじゃない？」などと、話し合いながら作り上げていく。保育者は、子ども達の思いをくみ取りながら、製作に必要なものを準備したり、それぞれのイメージを形にできるようにさりげなくアドバイスしたりして、“自分たちですすめている”ことが実感できるように、必要な時に援助するようにしている。

この日は、舞台上で数回劇遊びを経験した頃であり、子ども達が劇遊びの全体像がつかめてきた段階だった。「昨日よりできた」という表現は、“言葉の掛け合いがスムーズだった”“動きがうまくいった”など、子ども達なりに“良くなってきた”という思いの感想だったと思われる。

育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びを支える基礎

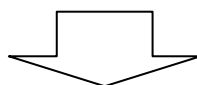
- ・協同性

取り組んできたことが形となっていくことや、見ている人たちに認められたり楽しんでもらえたりしたことを感じるにより、目標に向かって取り組む喜びを感じることができる。

○学びの芽生え

- ・表現力

言葉や動きを楽しんだり工夫したりしながら、役になりきってそのものらしく表現する。また、音楽を感じ取って歌唱の表現を工夫する。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第3期みんななかよし

- ・K-2 みんなであそぼう なかよくなるう I ～なかよししゅうかいをしよう～ 協力して集会の準備をし、学年の友だちと仲良くなりながら集会を楽しむことができる。
- ・J-3 どうぶつらんどへようこそⅢ ～どうぶつらんどでみんなげんきにあそぼう～ 動物の特徴をとらえながら、友だちと仲良く歌ったり踊ったりすることを楽しむ。

小学校学習指導要領解説

国語編 P41 第1学年及び第2学年 内容 C読むこと カ 目的に応じた読書に関する指導事項 ②言語活動例イ 物語の読み聞かせを聞いたり、物語を演じたりする言語活動

物語を読み聞かせてもらったり、それらを簡単な劇にしたりして楽しむ言語活動

音楽編 P23 第1学年及び第2学年 内容 A 表現(1)イ歌詞の表す情景や気持ちを想像したり、楽曲の気分を感じ取ったりし、思いをもって歌うこと

歌詞の表す情景や場面を想像して楽しんだり、登場する人物や動物になりきって歌ったりする。

異年齢児とのかかわり

7 異年齢児との遊びや当番活動を通して、自信をもって活動しようとする

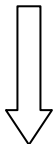
4～3月頃

5歳児

保育所、幼稚園での5歳児は、もっとも年上なので、様々な場面でリーダーシップをとっている。また、年下とのかかわりによって、思いやりをもったり、自分への自信につながったりしているのである。

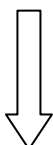
1/22

お正月遊びをしているこの時期、3歳児と一緒に遊んでも多くなってきた。5歳児の部屋に遊びに来た3歳児に対してやさしく接しながら遊んでいた。



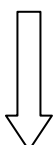
1/22

当番活動は、5歳児の大事な仕事。4歳児の時から、「年長になったら、欠席調べをする」ことに憧れをもっていた。毎日、各クラスを回って欠席数を聞き、職員室に報告に行っている。



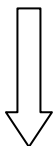
2/18

3、4歳児と一緒に遊ぶことも多く、慣れた様子で、自分より年下のお世話をする5歳児たち。自分たちが体験した一日入学での遊びを、今度は、4歳児に教えて一緒に遊ぶこともある。



2/21

4月に入園してくる予定の幼児に、プレゼントを作ったり、体験入園の時に、プレゼントを渡したりすることで、自分たちは、4月から小学生になることを意識することもある。



育っているもの

確かな学力につながる基礎

○学びの芽生え

- ・表現力
- ・個数を合わせる力

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・自分への自信
- 人間関係
- ・思いやり

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・身体を動かす喜び



スタートカリキュラム

- F-4 がっこうのなかのことばやかずをさがそう
- G-1 きょうしつをすてきにしよう
- G-2 きょうしつのなかのことばやかずをさがそう
- H-1 ともだちといろいろなおにあそびをしよう
- J-2 どうぶつらんどでもっとなかよくなる



小学校教育課程

- ・算数編 P58 第1学年 内容A数と計算(2)
- ・生活編 P38 第1学年及び第2学年 内容(9)
- ・体育編 第1学年～第4学年 内容E ゲーム
- ・図画工作編 P26 第1学年及び第2学年 内容A表現
- ・道徳編 P42 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点2(2)

教えちやる

2013年1月22日(火)

5歳児

事例

ストローで息を吐くと、コップから膨らんだビニールが出てくるおもちゃを作り、遊んでいた5歳児達。

そこへ、3歳児が遊びにやってきた。「ばらさん(3歳児のクラス名)が作りたいみたいやき、一緒に作っちゃって。」と保育者が言うと、①「教えちやる。」とセイヤが言う。ヒロ(3歳児)がビニールに絵を描



いていると、セイヤは、「そんな下に描いたら、ここ、くくるき、いかんで。」「そこやったらいいで。」等教えてあげていた。シンヤもやってきて、シンヤとセイヤがヒロ(3歳児)のおもちゃ作りを手伝った。

次々、3歳児達が来るので、すでにおもちゃを作って遊んでいた5歳児が先生になって、みんなでおもちゃを一緒に作っていた。そして、一緒に、出来上がったおもちゃを膨らませて、遊んでいた。

記録者考察

①より

3歳児に教えることになったシンヤとセイヤ。自分より年下の3歳児が困らないように、自分達がついさっき作ったばかりのおもちゃの作り方を教える。難しい所は、やってあげていた。ヒロ(3歳児)も、器用に作ってくれているセイヤをじっと見ていた。ヒロ(3歳児)の中にも、セイヤに対して「あこがれ」の気持ちを持つことになったのではないか。

保育者考察

天気が悪く庭に出られなかったこの日、傘入れのビニール袋を使ったおもちゃ作りを保育者が始めると、周りで遊んでいた子ども達はすぐに「先生、何つくるが?」と興味をもって集まってきた。保育者が「楽しいもの」と言いながら作り続けると、子ども達も真似て材料を取り出し、作り始める。袋にストローを取り付けるところで、絵を下の方に描いていた子どもは絵が隠れてしまい、「もう少し上からやないといかんかったね」と子ども同士話す場面があった。

3歳児に対して、自分が作ってみてわかったことを、「ここはこうやったらいいで」と教えてあげたり、わかりやすいようにテープを貼る位置を指で押さえてあげたりと、優しく関わる姿が見られる。

異年齢が一緒になって遊ぶなかで、これまで自分が年上の友だちからしてもらったように、今度は自分が小さい友だちに優しくしてあげようという気持ちが、自然に子ども達の中に育っていることを感じている。また、小さい友だちから頼りにされることは嬉しく、自分が教えてあげられることは大きな自信につながっていると思われる。

育っているもの

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

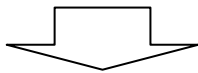
- ・自分への自信

3歳児にやさしく教えることで、役に立つことの喜びを味わうことができ、自分への自信につながっていく。

○人間関係

- ・思いやり

異年齢の交流は、お互いの子ども達にとって成長の機会となる。5歳児は、3歳児に合わせたり、やさしくしたりすることで、相手の立場を考え行動することを学ぶ。



小学校教育課程

小学校学習指導要領解説

生活編 P38 第1学年及び第2学年 内容(9)自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

身近な人々と直接かかわり合う活動によって、自分を見つめ、自分のよさや可能性に気付き、自分の成長についての一人一人の認識を深めることが大切である。

道徳編 P42 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかかわりに関すること(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。

身近にいる幼い人や高齢者等との触れ合いの中で、相手のことを考え、優しく接し、具体的に親切な行為ができるようにすることが求められる。

それに一つ足したら7人

2013年1月22日(火)

5歳児

事例

①年長児の仕事として、給食前に、当番さんが、各クラスを回り、今日の欠席の人数を聞き、職員室に行って報告している。

今日も、マサキ、シンヤ、ハルコ、ジュンの4人が報告に来た。「今日の欠席は、ほと(5歳児クラス)は1人で、もも(4歳児クラス)が4人で、ばら(3歳児クラス)が2人です。」と4人が声を合わせて言った。教頭先生が、黒板に人数を書き、「何人になるかな?」と言った。園長先生も「今日はたくさん休んでいるね。今日の難しいね。2人と4人と1人で?」と言う。マサキは指を折って数える。少ししてから、シンヤが「7人。」と言った。園長先生が、「2人と4人やったら何人?」と聞くと、②シンヤは、「2人と4人やったら6人。」と答える。続けて、③「それに一つ足したら、7人。」と答えるシンヤ。教頭先生が黒板に「7人」と書いた。



合計人数が分かったら、「失礼しました。」と言って、4人は、自分達の役目を終えて、ほとぐみの教室に帰っていった。

記録者考察

①より

当番活動の一つである「出席調べ」は、5歳児の大事な役目である。この役目をするために、給食前になると各クラスを回り、欠席数を聞いていく。自信を持って職員室に伝えに来る子どもたちの表情から、「当番だからする」のではなく、大きくなった自分を意識したり、子どもなりに人の役に立つ喜びを味わったりしているからこそ、進んで行っていることが想像できる。

②より

シンヤは、2と4を足すと6であることを瞬時に計算したのか、答えを暗記していたのかは分からないが、二つの数量を合わせた大きさを求めることは、「足す」ことであるという具体的場面を経験しているのである。このような具体的場面を経験することによって、足し算が用いられる場合を一般化することができるようになってくる。

③より

数えるというのは、1を加算することなので、おそらくシンヤは、普段から数えることをしているのだろう。だから、1つ足したら、次の数字になることを理解しているのではないか。

保育者考察

当番活動は、年中の頃から年長の姿を見て憧れをもっていた。自分達が年長になり、クラスの中の当番の他に「出席調べ」をしている。当番のチームは各クラスを周り、担任に「お休みは何人ですか?」と聞き、職員室に報告に行く。初めは「はとが○人、ももが○人、ばらが○人です」と、一クラスずつ言ったり、欠席者がいないことを「ゼロ人です」と報告したりしていたのだが、人数が同じ時は、「はともももが○人」とまとめて言うことや、ゼロの時は、「いません」という言い方をすることなどを、その都度園長先生や教頭先生が教えてくださり、段々とわかってきている。

時には、「どこのクラスが一番お休みが多いかな?」と聞いたり、「はとももものお休みの人数を合わせたら何人かな?」などと一緒に数えたりして、数遊びを楽しむこともある。この日は人数が多く、計算することは難しいかと思われたが、シンヤが答えたことに、園長先生も驚いたようだ。

また、当番活動以外でも、カードゲームやトランプをして遊ぶことで、数字への興味も高まり、「足すといくつになる」ということも理解している子どもが増えてきた。指を折って数える子どももいるが、少ない数字であればすぐに答えられる子どももいる。理解度は様々であり、友だちの様子に刺激を受けて数えてみようとしている。

育てているもの

確かな学力につながる基礎
○学びの芽生え
・個数を合わせる力

実際に物を数えたり、比べたりすることを経験して途中で、数を合わせることができ、それが、「足し算」であるということを理解することができる。

豊かな心につながる基礎
○自尊感情
・自分への自信

当番活動を通して、子ども自身が大きくなった自分を実感するとともに、人の役に立つ喜びを味わうことができ、自分に自信を持つことにつながっていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

- スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき
- ・ F-4 がっこうのこと もっとしりたいなⅡ～がっこうのなかのことばやかずをさがそう～
 - ・ G-2 きょうしつ がっきゅうだいすきⅡ～きょうしつのなかのことばやかずをさがそう～
 - ・ J-2 どうぶつらんどへようこそⅡ～どうぶつらんどでもっとなかよくなる～
- 学校の中にあるものの数や数字に関心をもったり、仲良し作りをしながら数に親しんだりする。

小学校学習指導要領解説

算数編 P58 第1学年 内容 A数と計算 (2)加法、減法 イ 1位数と1位数との加法及びその逆の減法の計算の仕方を考え、それらの計算が確実にできること。

はじめにある数量に、追加したり、それから増加したりしたときの大きさを求める場合や、同時に存在する二つの数量を合わせた大きさを求める場合は、加法を用いることを理解する。

生活編 P38 第1学年及び第2学年 内容(9)自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

身近な人々と直接かかわり合う活動によって、自分を見つめ、自分のよさや可能性に気付き、自分の成長についての一人一人の認識を深めることが大切である。

みんなで遊ぼう

2013年2月18日

5歳児

事例

今日は雨なので、園庭ではなく、遊戯室に3～5歳児が集まって一緒に体を動かすことにした。5歳児は、3歳児の所に行って手をつなぎ、二人組になった。そして、手をつないだまま大きな円になった。①カナは、3歳児がうまく袋から縄跳びを出すことができなかつたので、手伝ってあげたり、場所を移動する時、そっと3歳児の背中に手を回したり、手をつないだりしていた。その後、音楽に合わせて、「なわとび体操」を行った。



一旦教室に帰った後、また4、5歳児が遊戯室に集まった。今度は、4歳児と一緒に遊んだ。②5歳児が一日入学で1年生と一緒に経験した「手つなぎオニ」を4歳児に教えて、一緒に遊んだ。

記録者考察

①より

カナは、誰に言われるわけでもなく、3歳児が困っていたら自然に手を貸したり、さりげなく行動をうながしたりしていた。自発的に3歳児のお世話をしたり積極的に教えたりすることは、カナにとって、人とかわかることの喜びや自信につながっていく。

②より

一日入学で経験した内容を、今度は、4歳児と一緒に楽しむ5歳児たち。一日入学や1年生との交流活動で体験した内容を、遊びの中に取り入れられたり、教わったことを今度は自分たちが4歳児に教えることで、園内に広げたりしていることがわかった。5歳児達は、慣れた様子で、4歳児とペアを作り「手つなぎオニ」を楽しんだ。このような異年齢との活動の経験が、5歳児同士での協同的な活動の内容をさらに高めていくのであろう。

保育者考察

年長児は卒園式を1ヶ月後に控え、“あともう少しで卒園”“もうすぐ1年生”という期待をもち始めた頃である。残りの1ヶ月の間には「おわかれ会」や「お出かけ給食」など、異年齢児と一緒に過ごす時間も増えてくる。そのなかでは、頼りにされることで自分達の成長を実感したり、「ありがとう」と言われることで友達役に立てることの嬉しさを感じたりして欲しいと願っている。

自分達が年少年中の時、年上の友達からやさしくしてもらったり、お世話をしてもらったりした経験があり、今度は自分達がしてあげる番になって、自然と行動している。その姿からは、年間を通して、遊びや生活のなかで異年齢児の関わりが、最初は意図的、計画的に行う活動から、いつの間にか自然におこなわれ、そのなかで“やさしさ”や“思いやり”がしっかりと伝わっていることを感じ、嬉しく思っている。

育っているもの

豊かな心につながる基礎

○自尊感情

- ・自分への自信

4歳児に遊びを伝えることで、リーダーシップの経験をもつことになり、それが、自分への自信につながっていく。

○人間関係

- ・思いやり

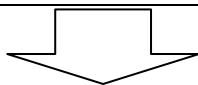
異年齢児との交流は、お互いの子ども達にとって成長の機会となる。5歳児は、3歳児に合わせてたり、やさしくしたりすることで、相手の立場を考え行動することを学ぶ。

体力・健康につながる基礎

○健康・安全

- ・身体を動かす喜び

みんなと一緒に体を動かすことで、身体を動かす心地良さを味わい、自ら進んで体を動かそうとする意欲が育ってくる。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム大単元「いちねんせいになったよ」第2期がっこうだいすき H-1 みんなであそぼうⅡ～ともだちといろいろなおにあそびをしよう～身体を動かして遊ぶことを通じて数に親しんだり、鬼遊びに進んで取り組もうとしたりする。

小学校学習指導要領解説

生活編 P38 第1学年及び第2学年 内容(9)自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

身近な人々と直接かかわり合う活動によって、自分を見つめ、自分のよさや可能性に気付き、自分の成長についての一人一人の認識を深めることが大切である。

道徳編 P42 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかかわりに関すること(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。

身近にいる幼い人や高齢者等との触れ合いの中で、相手のことを考え、優しく接し、具体的に親切な行為ができるようにすることが求められる。

体育編 第1学年～第4学年 内容E ゲーム

一定の区域で逃げる、追いかける、陣地を取り合うなどの簡単な規則の鬼遊びしたり、工夫した区域や用具で楽しく鬼遊びをしたりする。

喜んでくれたね。

2013年2月21日

5歳児

事例

2月21日に、新年度入園予定幼児の体験入園があり、幼稚園に遊びに来ることになっていた。5歳児達は、その日に向けて、新入児に渡すプレゼントを作っていた。折り紙で作ったカメラ、ビニールテープで三つ編みした紐のついた紙のバッグ、メダルなど、全部子どもたちが遊びの中で、それぞれ自分の得意分野を生かして作ったものである。

①2月19日には、ユウコ、レイナ、コハル、サキコは、メダルの後ろに、

「たいけんにゆうえん 2013.2.21」と一つ一ついねいに書いていた。次に日には、カナとユウコは、出来たバッグの中に、ティッシュを入れていた。

当日は、15名の新入児がやってきて、3～5歳児が縄跳びをしたり、ドッジボールをしたり、砂場で遊んだりしている中、入園予定の幼児たちも、一緒に園庭で遊んだ。入園予定の幼児たちが帰る時間になった時に、②5歳児達は、自分たちが作ったプレゼントを一人一人に渡したり、メダルを首にかけてやったりしていた。「また、一緒に遊ぼうね。3月も来てください。」と声をそろえて言って、お別れした。



記録者考察

①より

子ども達は、自分より幼い子どもを念頭において、プレゼントを作ることで、「喜んでくれるかな。」「メダルを首にかけてあげよう。」等いろいろな思いをもつことができると考える。一人一人が、自分の得意な分野でプレゼントを作ることにより、自分たちが作ったプレゼントという意識も強くなるのだと思う。

②より

自分より幼い子どもと交流することで、「自分はお兄ちゃん、お姉ちゃんなんだ。」という意識が出てきたり、自分の成長を確認したりすることができる。また、目の前にいるこの幼い子ども達が4月に入園するという事は、自分たちは小学生になるのだ、ということを実感する5歳児もいるかもしれない。

保育者考察

毎月2回「なかよしくらぶ」と称し、未就園児親子に園庭開放している。近所や顔見知りの友達、弟、妹が遊びに来ることを子どもたちは楽しみにしている。

毎年、この時期になると体験入園が行われ、自分たちが入園するときや、昨年までの年長児の活動を見たり、体験したりしている。自分たちは卒園していなくなるけれど、新しく入園してくる小さな友達に喜んでもらおうと、それぞれが得意分野を生かしてプレゼント作りをし、互いを認め合える機会になったのではないだろうか。子どもたちは、文字や数字を書くことで、自分の思いが伝わることを実感できる活動となり、生活の中で、人に思いを伝える手段として、文字や数字を使えるようになった喜びも感じているようだ。

自分たちが作ったプレゼントを手渡し「ありがとう」と言ってもらったり、嬉しそうにしている未就園児の姿を見たりして、人に喜んでもらえることの喜びを味わえたのではないだろうか。また、未就園児の保護者からも、認め言葉があり、自分に自信をもつ1つの活動になったのではないだろうか。

育てているもの

確かな学力につながる基礎

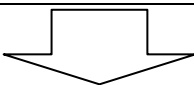
○学びの芽生え
・表現力

子ども達は、制作活動を通して、つくりだす喜びを味わい、自分の思いの実現を図ることができる。

豊かな心につながる基礎

○自尊感情
・自分への自信

自分より年下の幼児と交流することにより、相手の立場を考え行動したり、役に立つことの喜びを味わったりすることができる。それが、自分への自信につながっていく。



小学校教育課程

スタートカリキュラム

スタートカリキュラム 大単元「いちねんせいになったよ」 第2期がっこうだいすき G-1きょうしつがっきゅうだいすきI ～きょうしつをすてきにしよう～ 教室など身近な環境を飾る作品を、いろいろな紙を使って作ることを楽しんだり、作品について自分の思いを話したりする。

小学校学習指導要領解説

図画工作編 P26 第1学年及び第2学年 内容 A表現 イ好きな色を選んだり、いろいろな形をつくって楽しんだりしながら表すこと。

形や色などを楽しみ、周りの友人とかかわり合いながら、自分の思いをはっきりさせたり、作りつつある形や色から発想を広げたりすることが大切である。

生活編 P38 第1学年及び第2学年 内容(9)自分自身の成長を振り返り、多くの人々の支えにより自分が大きくなったこと、自分でできるようになったこと、役割が増えたことなどが分かり、これまでの生活や成長を支えてくれた人々に感謝の気持ちをもつとともに、これからの成長への願いをもって、意欲的に生活することができるようにする。

身近な人々と直接かかわり合う活動によって、自分を見つめ、自分のよさや可能性に気づき、自分の成長についての一人一人の認識を深めることが大切である。

道徳編 P42 第1学年及び第2学年 内容項目の指導の観点 2主として他の人とのかかわりに関すること(2)幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。

身近にいる幼い人や高齢者等との触れ合いの中で、相手のことを考え、優しく接し、具体的に親切な行為ができるようにすることが求められる。

※本アプローチカリキュムに記載されている園児名は、すべて仮名である

※掲載物使用承諾済